

第46回 全日本中学校国語教育研究協議会（岐阜大会）  
第22回 岐阜県中学校国語科研究部会（岐阜地区大会）

# 大会集録

ぎふこくご

No. 68 2018. 2

岐阜県小中学校教育研究会  
中学校国語科研究部会

# 目 次

◇挨拶	全日本中学校国語教育研究協議会会長 板橋区立赤塚第一中学校長 新飯田 潤 一	2
	全日本中学校国語教育研究協議会（岐阜大会）実行委員長 恵那市立明智中学校長 伊 藤 勝 彦	3
	岐阜県教育委員会 学校支援課 山 田 高 秀	4
◇大会開催要項・日程		5
◇文部科学省指導講話	文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 杉 本 直 美 氏	8
◇記念講話	杏林大学外国語学部教授 金田一 秀 穂 氏	14
◇研究授業・研究発表・協議		32
◇分 科 会		
A話すこと・聞くこと部会		37
B書くことⅠ（確かに書く）部会		41
B書くことⅡ（豊かに書く）部会		45
C読むことⅠ（説明的文章）部会		49
C読むことⅡ（文学的文章）部会		53
言語文化部会		57
◇一本の電話から	全国大会準備委員長 安 田 英 士	61
◇全国大会を終えて	全国大会事務局長 永 井 伸 幸	62
◇参加者の声		65
◇都道府県別大会参加者数		66
◇全日本中学校国語教育研究協議会岐阜大会 研究メンバー		67
◇大会実行委員会役員一覧		68
◇全日本中学校国語教育研究協議会岐阜大会実行委員会組織図		69
◇会 則		70

## 御 礼

全日本中学校国語教育研究協議会会長  
板橋区立赤塚第一中学校長 新飯田 潤 一

---

第46回全日本中学校国語教育研究協議会岐阜大会並びに第22回岐阜県中学校国語科研究部会岐阜地区大会が、天候にも恵まれ10月26日、27日に開催できましたこと、誠にありがとうございました。

改めて、今回の岐阜大会を開催するにあたり、実行委員長としてとりまとめて頂いた伊藤勝彦校長先生はじめ、ご尽力頂いたすべての方々に感謝の意を表したいと思います。

1日目の基調提案、杉本直美教科調査官による講話、また、「やさしい日本語」という演題でお話頂いた金田一秀穂先生のご講演、夜の情報交換会、そして、2日目の6本の公開授業、実践発表分科会とどれもが大変有意義な内容で、まさしく明日からの授業実践にすぐに役立つすばらしい内容だったと思います。また大会運営そのものもおもてなしの心あふれるすばらしい運営で、周到的準備の下で進めて頂きました。

改めて本大会を開催するにあたり、お力添え頂いた岐阜県の関係役員の皆さま、会員の皆さま方に御礼申し上げたいと存じます。

また、全国から多くの先生方にもご参加頂きました。本全日本中学校国語教育研究協議会の目的は、会則にもありますように、「全国の中学校の国語教育関係者の力を結集し、国語教育に関する問題を積極的に取り上げて研究するとともに、日本の次代を担う生徒の国語力を高めていくこと」であります。今回の大会もまさしくその目的を果たすべくすばらしい大会にすることができたことと思います。

昨年3月31日に、文部科学省から新学習指導要領が告示されました。今年度は、周知・徹底の期間となり、中学校においては、30年度から移行期間に入り、33年度から全面実施となります。今回の岐阜県での大会の成果がこれからの中学校国語科の授業のあり方の指針となることと思います。

そして、来年度の栃木県日光市において開催されます第47回大会に引き継がれ、また、そこでも多くの先生方のご参加を得て、更なるすばらしい大会になりますことを祈念しました御礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

## 全国大会を終えて、そして、その先にあるもの

全日本中学校国語教育研究協議会（岐阜大会）実行委員長  
恵那市立明智中学校長 伊藤勝彦

去る10月26日、27日、台風の間の秋晴れの中、第46回全日本中学校国語教育研究協議会岐阜大会並びに第22回岐阜県中学校国語科研究部会岐阜地区大会がじゅうろくプラザ、岐阜市立加納中学校、岐阜市立陽南中学校、岐阜大学教育学部附属中学校を会場に、県内外から500名を超える先生方の参加によって盛大に行われました。大会開催にあたり、多くの関係の皆様方のご支援やご協力をいただいたことに対して深く感謝申し上げます。

第1日目には、文部科学省調査官杉本直美様から新学習指導要領にかかわり国語の授業づくりに関する講話をいただきました。その中で、今回の岐阜県の大会主題「生きてはたらく言語能力の育成～言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して～」が時機を得たものであると高い評価をいただきました。

わたくしども岐阜県の歩んできた道、あるいは今後歩もうとする道筋が今日的であり、今後の方向を示すものだと確信をもつことのできた機会となりました。また、金田一秀穂様の記念講演は、日本語の在り方を新学習指導要領と重ね合わせて考えるよい機会になったと多くの好評の声を聞きました。

第2日目の授業は、3会場6つの授業が行われました。どの教室も溢れんばかりの参観者で熱気に満ちた授業が行われました。自分の考えを仲間に向かって滔々と語る生徒、仲間に向かってもらおうと論理的に語る生徒、仲間とわかるまで考えを交流する生徒、教師の働きかけや仲間の問いかけからより深まりが生み出す生徒など、生徒の主体的な姿が多くみられた教室となっていました。その後の分科会では、授業や研究発表について熱心な討議が行われました。

これら2日間の大会を通して、全国の多くの先生方から高い評価をいただきました。その中でとくに代表的なものが二つありました。一つは、「岐阜の先生方が一つになって創り上げられようとした大会であることがよくわかりました」というもの。そして、もう一つが、「生徒の学習に取り組む主体的な姿に驚きました」というものです。

これらは、わたくしたちが今回の岐阜大会で標榜した「オール岐阜で取り組む全国大会」「生徒の主体的な姿を授業で魅せる全国大会」という二つが、全国から来られた先生方に伝わったということに他なりません。

この岐阜大会で、岐阜の国語教育のすばらしさ、岐阜の国語教師のすばらしさを全国に発信できたのではないかと考えています。これも、県下の国語の先生方のこの岐阜大会を成功させようという強い思いや使命感によって実現されたものだと思っています。改めて、先生方のご尽力に深謝いたします。

全国大会はこれで終わりましたが、わたくしたちの歩みはこれからも続きます。次に開催される飛騨地区大会では、本大会の成果を生かしつつ、実施されることをお願いいたします。また、何年後かに、三度行われるであろう岐阜大会に向けて、確かな歩みを着実にしていくことが、わたくしたち、岐阜県の国語教師の使命であろうと考えています。

## 「対話」を通して思索する、「深まり」のある国語教室の創造へ

岐阜県教育委員会 学校支援課 山田 高 秀

まず、「第46回全日本中学校国語教育研究協議会」並びに「第22回岐阜県中学校国語科研究部会」を成功裏に終えられましたことに、お祝いと感謝の意を表したいと思います。

今大会において発表・公開された本県の実践例や授業はどれも、現行学習指導要領の下で取り組まれた実践の集大成と言うべきものであり、参加された全国の先生方にとって、明日からの実践にすぐにでも生かせる具体的提案に満ちていました。ここで得られた財産は、新学習指導要領の全面実施を控えた来年度以降にこそ、各学校で大いに参考となることでしょう。

さて、「ぎふこくご」記念号の執筆に際し、本稿でぜひ触れておきたいことがあります。それは、こうした優れた財産や知見が、かつて会員であった諸先輩方の先見の明によって支えられ、現役会員の皆様の熱意と実践の積み上げにより成されたものであるということです。この、至極当然のように聞こえるけれど、決して当たり前ではない営みがあったことを、私たち岐阜県の国語人は忘れてはならないと思うのです。

私事で恐縮ですが、中国研の研究部に部員としてお誘いいただいたのは、初任二校目にして初めての中学校勤務の折でした。その時、研究主題の「明日に生きる言語能力の育成」という言葉に出会い、「そうか、単なる知識としてではなく、『明日に生きる』言語能力を身に付けさせるのが自分の務めなんだな。」と気付かされました。また、副主題の「言葉への感性が育ち、学びがいのある国語教室の創造」を目にして、「なるほど、生徒一人一人がやる気になって自ら力を付ける授業づくりに努めなきゃならないんだな。」と自覚させられました。「生きて働く知識・技能」や「アクティブ・ラーニング」という言葉が流布する以前の、二十数年前の出来事です。

若き日の私にとって、何とも心躍る素敵な言葉との出会いであったと今更ながらに思います。

本大会の副主題「言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して」についても、文部科学省の杉本調査官が、「今まさに（指導の現場に）求められているもの」として、大変素晴らしいとおっしゃって見えました。県中国研では、今も昔も、不易と流行の絶妙なバランスの中で目標を立て、多くの実践者がこれを具現するための努力を積み重ねることによって、全国的にみても質の高い国語教育を実現してきたのです。こうした真摯な営みが続く限り、中国研会員の皆様の御実践は、これからも、岐阜県の子どもたちに対する「生きてはたらく」学びとなって還元されていくことでしょう。

最後に、そうした願いと期待を込め、今後、国語科指導において取り組むべき課題を2点、新学習指導要領の改訂を踏まえて提案します。

### ■言語活動の創意工夫

「言語活動例」においては、従前、具体的な言語活動が提示、解説されていましたが、言語活動の種類ごとにまとめた形で示されています。したがって、単元に設定する言語活動については、各学校の創意工夫により開発する必要があります。中国研作成の「生きてはたらく言語活動一覧表」等も参考にしながら、確実に資質・能力が身に付く言語活動の工夫が期待されます。

### ■学習過程の明確化と「考えの形成」の重視

全ての領域で「考えの形成」及び「共有」に関する指導事項が位置付けられました。また、それぞれの学習過程では、目指す資質・能力を身に付けるために、「言葉による見方・考え方」を働かせ、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善をする必要があります。

これらの課題が解決されることへの期待を込め、本稿のタイトルを『対話』を通して思索する、『深まり』のある国語教室の創造へ」としました。明日を生きる子どもたちのために、皆様方が一層研鑽されることを祈念しています。

# 大会開催要項・日程

## 1. 大会主題 **生きてはたらく言語能力の育成**

—言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して—

2. 期 日 平成29年10月26日（木）・27日（金）

3. 会 場 第1日 じゅうろくプラザ（岐阜市文化産業交流センター）  
第2日 岐阜市立加納中学校 岐阜市立陽南中学校  
岐阜大学教育学部附属中学校

## 4. 日 程

10月26日午後

13:30	14:20	14:35	15:35	15:50	17:10	17:25	18:25	19:00	21:00
受付	開会行事 基調提案	休憩	文部科学省 講話	休憩	記念講演	移動	理事会	移動	情報 交換会

10月27日

9:40	10:30	10:50	12:00	13:00	14:40	14:50
受付	公開授業	休憩	授業研究 分科会	休憩	実践発表 分科会	閉会行事

## 5. 講 話

文部科学省講話「国語科教育における今日的課題」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 杉本直美氏

記念講演「やさしい日本語」

杏林大学外国語学部教授 金田一秀穂氏

# 全 体 会



※著作権の関係により、以下の項目については、ホームページ上に掲載することを控えさせていただきます。

8 ページ から 13 ページ

文部科学省講話

## 「国語科教育における今日的課題」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 杉本直美 氏

14 ページ から 31 ページ

記念講演

## 「やさしい日本語」

杏林大学外国語学部教授 金田一秀穂 氏

研究授業・研究発表・協議

研究授業

部 会	教 材 名	授業者	司会者	助言者
話すこと・ 聞くこと	未来の地元創造会議 ～話し合って提案をまとめよう～	岐阜市立陽南中 学校教諭 篠田 陽子	可児市立中部中 学校教諭 木下 静樹	可茂教育事務所 課長補佐 横山 美智代
書くことⅠ (確かに書く)	にぎわいのある岐阜市にするために ～根拠を明確にして意見を書こう～	岐阜市立加納中 学校教諭 梅田 佳宏	恵那市立恵那西 中学校教諭 郷田 賢	東濃教育事務所 課長補佐 伊藤 政之
書くことⅡ (豊かに書く)	「ある日の自分」の物語を書こう ～表現のしかたを工夫して書こう～	岐阜大学教育学部 附属中学校教諭 野々村 琢磨	各務原市立那加 中学校教諭 桃瀬 寛明	岐阜県教育委員 会課長補佐 富山 哲成
読むことⅠ (説明的文章)	布施さんに挑戦 ～君は「最後の晚餐」を知っているか～	岐阜市立陽南中 学校教諭 北原 章大	大垣市立大垣東 中学校教諭 渡辺 孝充	西濃教育事務所 課長補佐 馬淵 尚美
読むことⅡ (文学的文章)	社会に生きる自分を見つめる ～故郷～	岐阜大学教育学部 附属中学校教諭 山田 優貴	関市立緑ヶ丘中 学校教諭 古川 寛之	美濃教育事務所 指導主事 高橋 友之
言語文化	おくのほそ道の終着地・岐阜を想う ～夏草「おくのほそ道」から～	岐阜市立加納中 学校教諭 河合 のぞみ	高山市立松倉中 学校教諭 砂田 真里	飛騨教育事務所 課長補佐 京谷 貴幸

研究発表

部 会	研 究 テ ー マ	発 表 者
話 す こ と ・ 聞 く こ と	目的や場面に応じて適切に表現する能力の育成 ～言語活動の特徴と話材・テーマとの関わりを明確化する 指導の工夫～	可児市立中部中学校教諭 加藤 祐輝
	合意形成を図るための指導法の工夫 ～話し合うことの指導を通して～	栃木県小山市立第二中学校 教諭 池田 仁子
書 く こ と I (確かに書く)	相手・目的・場面状況に応じて、「確かに書く」能力の育成 ～分かりやすく・説得力のある文章を書くことができるた めの指導のあり方～	瑞浪市立瑞浪中学校教諭 水野 寛大
	魅力的な紙面を演出することを通し「確かに書く」力 を育成する実践 ～地元長浜をPRする観光冊子の編集から～	滋賀県長浜市立東中学校 教諭 大久保 明博
書 く こ と II (豊かに書く)	目的や意図に応じて、表現豊かな文章を書く能力の育成 ～多彩な表現や個性的な表現を駆使し、主観性の高い文章 を書く指導の工夫～	山県市立高富中学校教諭 深尾 寛
	生き生きと伝わる「描写」の工夫を学ぶ ～自分の表現に生かすことができる創作活動を目指して～	鳥取県西伯郡南部町立法勝 寺中学校教諭 矢田貝和志
読 む こ と I (説明的文章)	言語活動を通して、主体的・目的的に読む能力の育成 ～構成や論理展開の意図や効果に着目し、説明的文章を正 確に読み解くための指導の工夫～	池田町立池田中学校教諭 児玉 岳
	多面的・多角的な視点で文章を読み、考えを広げ深め る指導法の工夫 ～比べ読みを通して、自分の考えを再構築しよう～	東京都世田谷区立太子堂中 学校主幹教諭 栃木 昌晃
読 む こ と II (文学的文章)	言語活動を通して、主体的・目的的に読む能力の育成 ～作者の表現意図に迫り、豊かに想像する力の高まりを実 感できる文学的文章の指導の工夫～	関市立桜ヶ丘中学校教諭 馬場 多希
	豊かな言語感覚を育み、学びをつなげる国語科教育の 創造 ～第3学年「握手」(光村図書)の実践を通して～	長崎県長崎市立小ヶ倉中 学校教諭 桐谷 祥平
言 語 文 化	言語文化に親しみ、生活につなげる能力の育成 ～古典の世界を身近に感じる指導の工夫～	飛騨市立古川中学校教諭 中島 英人
	主体的・対話的で深い学びを生む古典の授業 ～意欲的に取り組み古典の世界に親しむ言語活動の在り方～	北海道札幌市立前田中学校 教諭 上田 浩嗣

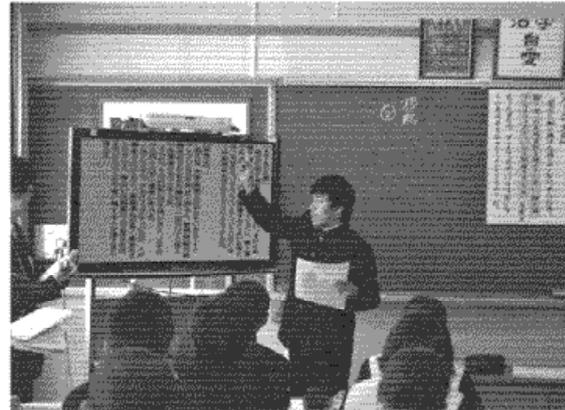
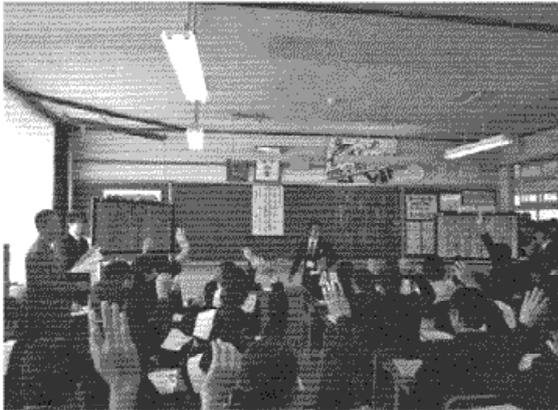
分科会主題と生徒の姿

分科会名	分科会主題並びにめざす生徒の姿
<p>話すこと・聞く こと部会</p> <p>陽南会場</p>	<p>目的や場面に応じて適切に表現する能力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言語活動の目的や相手が分かり、主体的に学習に取り組む姿</li> <li>・話材やテーマに魅力を感じ、どのような力を付ければ目的が達成できるかを明確にして取り組む姿</li> <li>・目的や場面に応じて、適切に話したり、聞いたり、話し合ったりすることで、生活の場に生かそうとする姿</li> </ul>
<p>書くことⅠ部会 (確かに書く)</p> <p>加納会場</p>	<p>相手・目的・場面状況に応じて、「確かに書く」能力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「書きたい」「書かなければならない」と、魅力や必然性を感じて、主体的に書く姿</li> <li>・「この1時間で学習したことを使って書くと、以前よりも分かりやすく・説得力のある文章を書くことができた」と実感をもつことができる姿</li> <li>・授業で学んだことを実生活の場でも生かして書こうとする姿</li> </ul>
<p>書くことⅡ部会 (豊かに書く)</p> <p>附属会場</p>	<p>目的や意図に応じて、表現豊かな文章を書く能力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・読み手に与える表現の効果を考えながら、多彩な表現や個性的な表現を駆使し、主観性の高い文章を書いている姿</li> </ul>
<p>読むことⅠ部会 (説明的文章)</p> <p>陽南会場</p>	<p>言語活動を通して、主体的・目的的に読む能力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・読み方が分かり、目的をもって読むことの学習に取り組むことができる姿</li> <li>・言語活動を通して、読む力の伸びを実感し、習得したことを活用できる姿</li> <li>・言語活動を通して、構成や論理展開について、根拠をもって適切に伝え合うことができる姿</li> </ul>
<p>読むことⅡ部会 (文学的文章)</p> <p>附属会場</p>	<p>言語活動を通して、主体的・目的的に読む能力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・読み方が分かり、目的をもって読むことの学習に取り組むことができる姿</li> <li>・言語活動を通して、読む力の伸びを実感し、活用することができる姿</li> <li>・言語活動を通して、想像的な読みを、根拠をもって適切に伝え合うことができる姿</li> </ul>
<p>言語文化部会</p> <p>加納会場</p>	<p>言語文化に親しみ、生活につなげる能力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・我が国に長く伝わる言語文化について関心を広げたり深めたりし、古典に親しむ姿</li> <li>・古典の世界と、身近な生活とのつながりを感じ、古典に親しむ姿</li> </ul>

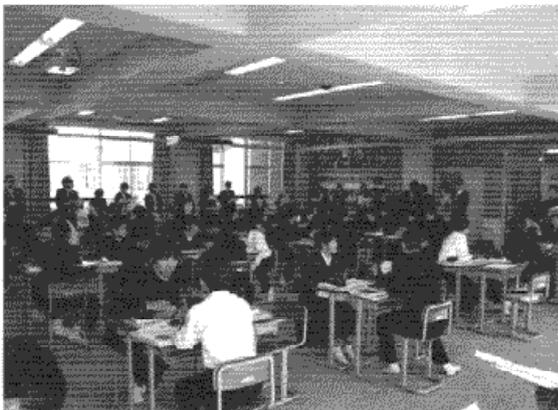
## 公開授業スナップ



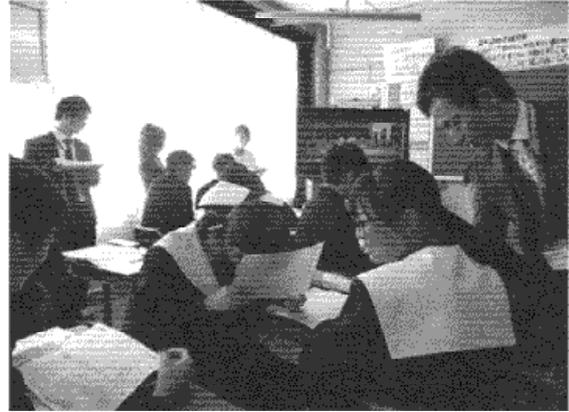
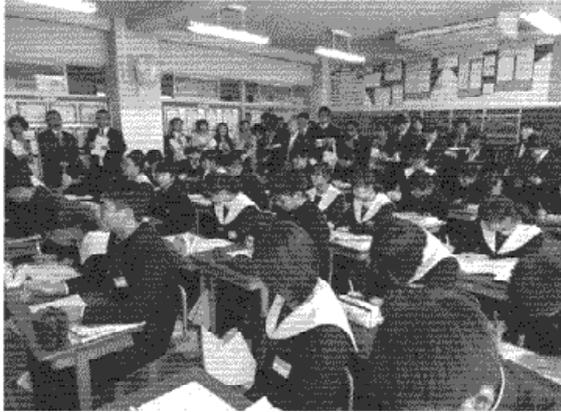
話すこと・聞くこと部会（陽南中会場）



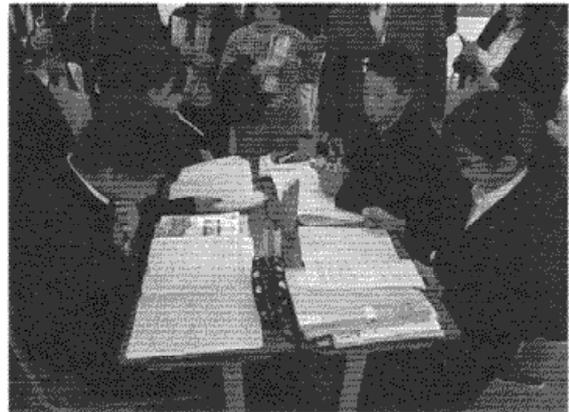
書くことⅠ部会（加納中会場）



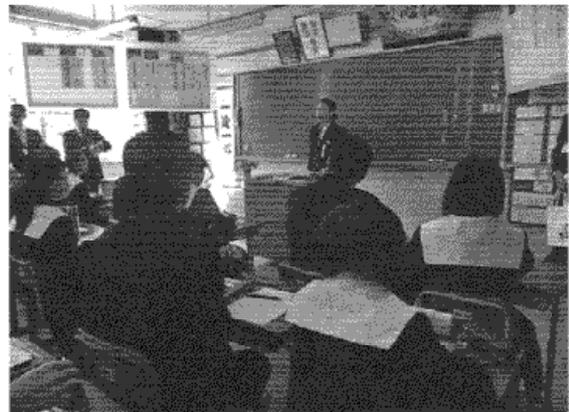
書くことⅡ部会（附属中会場）



読むことⅠ部会（陽南中会場）



読むことⅡ部会（附属中会場）



言語文化部会（加納中会場）

## 目的や場面に応じて適切に表現する能力の育成

～言語活動の特徴と話材・テーマとの関わりを明確化する指導の工夫～

### 【研究授業】

単元名 未来の地元創造会議

～話し合って提案をまとめよう

(光村図書3年)～

授業者：篠田 陽子(岐阜市立陽南中学校教諭)

司会：木下 静樹(可児市立中部中学校教諭)

記録：橋本 奈美(川辺町立川辺中学校教諭)

濱嶋 雅之(御嵩町立向陽中学校教諭)

部長：塚本 陽治(大垣市立星和中学校教諭)

指導：野田 守彦(可児市立広陵中学校校長)

助言：横山美智代(可茂教育事務所課長補佐)

### 1 授業のねらい

本単元でねらう力は、学習指導要領にある第3学年の指導事項エ「話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合うこと」である。その中でも、合意形成に向けて、互いの意見を生かし合うことを付けたい力とした。そのために設定した言語活動は、会議である。提案を一つに絞っていくための話し合う場として会議を位置付け、自分たちの意見がより多く反映されることを目指し、各委員会を立ち上げさせた。

本時は、各委員会で練り上げられた意見を一つの提案に絞っていく話し合いの時間であり、自分たちの意見のよさを生かし、異なる意見を調整しながら、よりよい結論に向かって合意形成を図っていく。そのためには、自分の考えを主張しながらも、相手の意見も尊重し、よりよい結論を導き出していくことが求められる。その点においても、提案を一つにまとめる会議という言語活動の設定が最適であると考えた。そして、この会議を充実させるためのテーマとして、生徒に必然のあるテーマを考えた。それが「10年後も残る地域活動を考える」であり、自分たちにできることを提案する活動を位置付けた。

### 2 研究討議

Q. 今日の授業までに陽南地区の実情について共有するような指示をされたか。

A. 現状についての話し合いをした。陽南地区のよさや課題をまとめた上で、人と人とをつなげたいという願いにたどり着いた。

Q. 話し言葉は消えてしまうから可視化が大事である。フリップやホワイトボードにまとめているのがよかった。

合意形成のためにはこだわりがある。普通は子どもたちの話し合いから大人の視点を入れるが、今日は大人から子どもの流れだったがそれはどうしてか。また、小グループでまとめるのは大変だが、次はどうまとめるのか。

A. 今実現できる提案をさせたかったのが、最初に大人の意見を聞かせた。また、実現性をもとに考えさせた。座標軸に「効果」という視点を加えて、考える視点を明確にした。次回はVTRを見て、納得できる意見が言えたかを検討したい。

Q. 子どもたちの聞く力が素晴らしい。板書していた生徒のまとめる力がその手本である。研究紀要にある「生きてはたらく言語能力一覧表」の力を付けてきていることが分かる。普段の授業で気を付けている点は何か。

A. 国語の時間だけでは難しい。そこで、学級活動などの場面で、話し合いを大切にしている。「あなたはどうか？」という問い返しを意図的に行っている。

Q. 視点を「実現性」と「継続性」ではなく、「実現性」と「効果」にしたのはなぜか。また、グループを8つにしたのはなぜか。

A. 「効果」にしたのは、相手意識がより強くな

ると考えたからである。8グループは、Iグループあたり4～5人となり、話しやすい。また、学級経営上いつも8つのグループで話し合っている。

- Q. 必然性を持たせられたのはなぜか。座標軸の実現性という軸は誰が生み出すのか。効果の軸も同じだが、軸は子どもがもつものではないか。また、テーマの「10年後も残る…」は難しい。10年後も考えて、今できることの方が適切だと思う。
- A. 必然性は、自治会長のインタビューを単元の導入で見せたことが大きい。中学生にも期待を寄せているという思いを感じ取ったからだと思う。座標軸を子どもから出させることは難しい。ただ、実現性については、10年後も残るものを見ると今できることが大切になってくる。そこで、実現性を提示した。10年後をテーマにしたのは、あえてマクロ化したからである。マクロの視点を持たせたことで、自分たちの地域という部分の焦点化を図った。
- Q. 話し合いに深まりも広がりもあった授業であった。合意形成の最終出口としてここでよかったか。
- A. 合意形成がびしっと決まればよいが、今回は合意形成の過程の中で自分の意見をもつことを重視した。一つに決まれば気持ちよいが、それぞれが考えていたという部分で評価してあげたい。
- Q. 授業者として子どもたちに期待するものは何か。
- A. 合意形成を図っていく中で、比較して自分の考えが深まった、確かになったということが自覚できるとよい。また、話し合いの中で積極的に発言しなくても、自分の変化が分かることが合意形成をしていく上で大事だと思う。それが子どもたちに期待することである。

### 3 指導助言

岐阜県がテーマとして掲げた「生きてはたらく言語能力の育成」の具体を示していた。

一つ目は、言語活動の吟味である。付けたい力は何かをはっきりさせている。社会に生きる能力としての情報活用能力にもつながっている。これらは全ての教科で重視されており、自分の考えをまとめたり伝えたりする力はどの教科でも育てたい言語能力である。また、それらの力は目的や場に応じたものであるからこそ、「言語活動＝付けたい力」となっているかを考えるべきである。

二つ目に、学習成立の条件が整えられていたことである。自分の住んでいる地域で、自分たちにできること、また、この場にふさわしい内容かどうかは、テーマによって条件が決められている。社会生活に生きてはたらくというテーマだと壮大なテーマを設定したがるが、そこに条件や制限をつけるテーマ設定が大事である。

三つ目に観点の追加である。その場限りの対応ではなく、そこに「効果」という観点を入れることで、生徒は深く考えることができた。

何のために学ぶのか、何ができればいいのか。今回はそれが生徒一人一人の学習プリントに書いてあった。また、学びの振り返りができるようになっていた。生徒の変容が分かるものであった。

よい授業とは、全員が分かる授業である。だから、評価規準は本時の授業の中での生徒の姿で書く。見届けができていない生徒にどうすればよいかを考えるのが次の一手である。また、語彙力を付けることも大切になってくる。



## 【実践発表・岐阜県】

テーマ 目的や場面に応じて適切に  
表現する能力の育成  
～言語活動の特徴と話材・テーマとの  
関わりを明確化する指導の工夫～

発表者：加藤 祐輝（可児市立中部中学校教諭）  
司会：木下 静樹（可児市立中部中学校教諭）  
記録：橋本 奈美（川辺町立川辺中学校教諭）  
濱嶋 雅之（御嵩町立向陽中学校教諭）  
部長：塚本 陽治（大垣市立星和中学校教諭）  
指導：野田 守彦（可児市立広陵中学校校長）  
助言：横山美智代（可茂教育事務所課長補佐）

### 1 提案の趣旨

全国学力学習状況調査の誤答から、生徒の実態として次のような状況が見て取れた。

個の意見を優先させてしまい、相手の立場を尊重する意識が低いことや、もとの意見に固執するあまり、発展性のない結論に至りやすく、互いの考えを生かすことができていない。

そこで、「話題を聞き比べて確かめる力」と「情報や意見を基にして、よりよい結論を求める力」を身に付けさせようと考えた。さらに、相手意識と目的意識を明確にするために実社会とつながりある単元「一人一人が支え合える街づくりの提案をしよう～可児に生きる私～」を設定し、①主体的な学びを生み出す単元構成の工夫、②合意形成のための学習形態の工夫、③合意形成に向けた指導方法の工夫、の3点を柱として、実践を行った。単元は「話し合って提案をまとめよう」（光村図書3年）をもとに教材化を図った。

### 2 研究討議

- Q. 話題に必然性があった。総合的な学習の時間との連携、評価のステップアップの具体、4人グループの効果について聞きたい。
- A. 今回の学習は国語の時間のみで対応した。評価のステップアップ表については、低位

の子の評価として活用した。話し方・聞き方のレベルの段階を示すものとしても活用した。4人グループは、何でも話し合えるぎりぎりの人数であると考えた。

- Q. ゲストティーチャーは子どものやる気を引き出すのに効果的である。合意形成のためには、全体での話し合いが大事であるが、そのときの学習課題は何か。
- A. 「今の発言はどう思うか」という投げかけによって聞き比べることを学習課題とした。

### 3 指導助言

二つの点で評価できる実践である。

一つ目は、合意形成のための聞き比べをさせるための手立てがあったことである。グループの話し合いにおける個別指導、評価立て札の導入により子どもに聞く必然性があった。自分の考えをもって主体的に参加することで、生徒は「認識→思考→表現→認識→…」を繰り返していた。これにより、生徒の聞き方が変わっていった。

二つ目は、発達段階から何を学ばせるかということを示したことである。小学校は「話題について話し合う」から始まり、「立場や意図を明確にして話し合う」段階まで指導する。中学校では、「相手の立場や目的に沿って話し合う」ことや「課題の解決に向けて、相手の意見を取り入れる」ことを目指す。これらの発達段階で適切に評価することで、どこに指導を入れるかが明確になる。評価のステップアップ表はそのよい例である。

今後は、評価をより明確にするために、ICTを評価に活用したり、自分の姿を見せて自己評価させたりする工夫が求められる。

## 【実践提案・栃木県】

テーマ 合意形成を図るための指導法の工夫  
～話し合うことの指導を通して～

提案者：池田 仁子（小山市立小山第二中学校教諭）  
司会：木下 静樹（可児市立中部中学校教諭）  
記録：橋本 奈美（川辺町立川辺中学校教諭）  
濱嶋 雅之（御嵩町立向陽中学校教諭）  
部長：塚本 陽治（大垣市立星和中学校教諭）  
指導：野田 守彦（可児市立広陵中学校校長）  
助言：横山美智代（可茂教育事務所課長補佐）

### 1 提案の趣旨

栃木県下都賀地区では、「話すこと・聞くこと」の指導の充実を研究主題として取り組んできた。「話すこと・聞くこと」における指導の授業実践を持ち寄り、研修を積み重ねてきたが、課題として常に挙げられるのは、評価についてである。自己評価、相互評価、あるいはビデオを用いての評価、聞き取ったことを書くことで評価するなど様々な評価を試みてきた。どのような評価方法が効果的であり、生徒が学習活動を通して「何ができるようになったか」を実感し、教師側も「何をできるようにさせたいか」という指導事項を明確にすることで、指導と評価の一体化を図った実践を積み重ねたいと考えた。本実践は「話し合って提案をまとめよう」（光村図書3年）を中心に行ったものである。

### 2 研究討議

- Q. 自己評価可能なものや9年間を見通したものなど工夫がある。話し方は状況に応じて異なるが、それに対応する評価表はあるのか。
- A. 各地区の先生にどう評価しているのかを出してもらって評価表を作っている。それを基にして、生徒の力を見ていくと共に、そこから単位時間に合わせた評価表を作っていく予定である。
- Q. 一つの評価表を毎時間使ったのか。
- A. 一つの評価表を分けて、今日はここまでといった使い方をした。また、自己評価する

ことで、話し方が悪いと採用されない、だから、学ぼうという意欲につながった。

また、参加者からは、以下のようなご指摘をいただいた。

- ・単元名は子どもの学習目標が分かるものがよい。単元名を大切にしたい。
- ・自己評価をすると評価力が付く。能力だけでなく、マナーや態度の項目も入れるとよい。
- ・自己評価表は子どもの姿である。それを継続して使い続けることで、メタ認知させる。それが経験値となる。

### 3 指導助言

合意形成の方法は色々ある。その一端を示した実践である。

小中9年間を見通した研究、指導である点は素晴らしい。小学校の6年間がつながって中学校に上がってくることを忘れてはならない。言語能力の育成にはそうした発達段階に応じた指導が有効である。

また、評価方法の工夫を考える上で大変参考となる実践である。指導と評価の一体化はもちろん、他者との考えをすり合わせる「調整力」はこれから必要となる力である。全国学力学習状況調査では、話合いの力は伸びてきている。それは話合い活動を通して力を付けてきているからである。ただ、話合い活動は行うが、自分の考えがうまく伝えられないと感じる生徒も多い。だから、評価を工夫して、うまく伝えられていることを実感させていかなければならない。今回の発表にあった評価表は、その実感につながるものである。

国語科では、力が自然と身に付いたのか、学習で身に付いたのかといったことを自覚させることが大切である。

## 相手・目的・場面状況に応じて、「確かに書く」能力の育成

～分かりやすく・説得力のある文章を書くことができるための指導の在り方～

単元名「にぎわいのある岐阜市にするために」  
～根拠を明確にして意見を書こう～

授業者：梅田 佳宏（岐阜市立加納中学校教諭）

司会：郷田 賢（恵那市立恵那西中学校教諭）

記録：谷口 順子（多治見市立多治見中学校教諭）

伊藤 隆（多治見市立北陵中学校教諭）

小島光太郎（恵那市立恵那東中学校教諭）

部長：伊藤 雄樹（岐阜市立本荘中学校教諭）

指導：松井紀史朗（中津川市立第二中学校校長）

助言：伊藤 政之（東濃教育事務所課長補佐）

### 1. 授業の意図

「何のために書くのが分からない」「書きたくない」と、書くことに目的意識をもつことができず、抵抗感を抱く生徒は少なくない。

その生徒たちに、「書きたい」「書かねばならない」と、魅力や必然性をもつことができるように、「岐阜市にぎわいまち公社」の萩原達也さんとタイアップし、「柳ヶ瀬ににぎわいを生み出すための中学生のアイデアが欲しい」という旨のビデオレターを単元導入時に生徒に提示した。そのことで、書くことに対する魅力や必然性をもつことができるようにした。

また、書き方を自分で見つけるという主体的な学習スタイルを取りたいと考え、2種類の例文の比較を行った。そして、「どちらの例文がよいか？それはなぜか？」と問いかけ、書き方を、自ら学び取ることができるようにした。

書くことは、非常に個人差が大きい学習だと捉えている。そのため、「得意をのぼす手立て」と「苦手を克服する手立て」の大きく2種類の手立てを準備した。

「得意をのぼす手立て」として、自分が書いた根拠に加えて、さらに別の視点の事例を取り上げ、説得力を増すことができるようなプロセスを示した補助プリント、「スキルアッププリン

トA」を準備した。また、タブレット端末を準備し、再調査を行い、意見文に新たな事例を書き加えることができるようにした。

「苦手を克服する手立て」として、「何を書けば良いかが分からない」生徒には、調べた事例を、蛍光ペンで視点ごとに色分けし、同じ色ごと（同じ視点）の事例を取り上げるか、別の色（別の視点）の事例を取り上げるかを選ぶことができるようにするための補助プリント、「スキルアッププリントB」を準備した。

加えて、「書く内容はあっても、どう書けばよいか分からない」生徒には、書き出しの部分を示した補助プリント「スキルアッププリントC」を準備し、どの生徒も学びを獲得できるようにした。

最後に、「やはり、学習したことを生かして書くと、説得力が増す」という実感をもつことが、次に書くときの原動力になると考え、単元第1時（学習を行う前）に意見文（以下 レディネス作文）を書いておき、本時に書いた意見文とレディネス作文とを読み比べ、ペアで、「どちらの文により説得力があるか。それはなぜか」を視点に交流する場面を位置付けた。このことで、「学習したことを生かして書くと、説得力が増す」という実感をもつことができるようにした。

### 2. 研究討議

Q. 途中で主張を変えた生徒がいたが、これは想定していたことなのか？またこの是非をどう考えているか？

A. レディネス作文を書いた時点で、主張がはっきりとしていない生徒もいた。この授業を受けて、主張がはっきりとする生徒もいると考え、変わるのとは悪くないことだと考えている。実際に意見文を書く時に、どの事例を用いて書くことがより説得力があるのかを、吟味した証拠だとも考えている。

- Q. 課題が『「根拠」に、どのように事例を書く  
と説得力が増すのだろうか』とあるが、「ど  
んな事例」ではなく、「どのように」と課題  
を設定したのは、どんな意図があるのか？
- A. 説得力が増す書き方として、事例の「取り  
上げ方」「並べ方」「述べ方」の3つがある  
と考えた。どの事例を取り上げると良いか  
だけでなく、どの事例をどのように並べ、  
述べていくかで説得力が変わることを捉え  
させたいと考え、「どのように」という言葉  
で課題設定を行った。
- Q. 意見文を書く時の、「にぎわい」という言葉  
が曖昧で、生徒に「おれ」はなかったか？
- A. 単元導入の第1時間目に「にぎわいまち公  
社」のビデオの中で、「①柳ヶ瀬の魅力を高め  
る」「②街中観光を楽しめるようにする」  
「③イベントを開いて、多くの人に来て頂く」  
ことで、「自転車通行量及び、歩行者量」が  
増えること」と定義した。また、ビデオレ  
ターの映像では、生徒の記憶から消えてい  
くと考えたため、拡大掲示を作成したり、  
生徒に配布したりした。
- Q. 今回の言語活動が、「岐阜市にぎわいまち公  
社」に、柳ヶ瀬ににぎわいを生み出すため  
のアイデアを送るというものだったが、こ  
ういった言語活動を仕組もうとする発想の  
もとや、なりゆきとはどんなものか？
- A. まず学習指導要領の指導事項である。2年  
生「書くこと ア」の指導事項には、「社会  
生活の中で課題を決め」とあるため、学校  
生活から離れた場面でのテーマを考えた。  
また、昨年度まで、岐阜新聞社に町おこ  
しのための意見文を書いて投稿していたが、  
「町おこし」という言葉の定義が曖昧で、  
生徒が困り感を示した。そこで、前述したよ  
うな定義で、「柳ヶ瀬ににぎわいを生み出す」  
ための意見文を書くという言語活動を設定  
した。

### 3. 指導助言

授業そのものが、「分かる子に頼る授業ではな

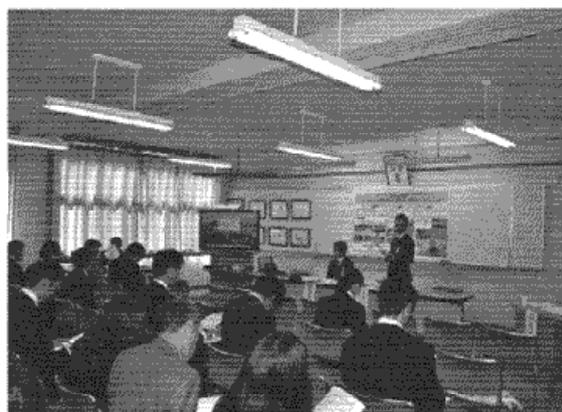
く、みんなで学びを進める授業」だと感じた。

その土台は、題材設定にある。「岐阜市にぎわ  
いまち公社」からの依頼を受けるという設定が、  
書くことに対する使命感や、意欲を駆り立て、  
相手意識・目的意識を一層強化していたことに  
あると考える。

また、指導事項と生徒の実態に即して、「何が  
できたらOKなのか」を明確にし、2つの例文  
を比較することを通して、説得力の増す書き方  
を生徒が探し・見つけ・獲得している。生徒が  
自ら考える場面を上手に設定していた。また、  
「例文②はダメなの？」と問い返すことで、「例  
文②の事例の並べ方にも有効性があるが、主張  
やその理由があっているものを選ぶことが大切  
だということ」を、生徒が深く認識していた。

また、個に応じた指導援助が充実していた。  
追加で情報を調べたい生徒は、タブレット端末  
で再調査を行ったり、書き出し方に困る生徒  
には、書き出しの補助を行うプリントを示したり  
するなど、指導援助が豊富であった。

さらに今後は、「取り上げた内容がふさわしい  
ものであるのか」という吟味・検討を大切にし  
ていけると素晴らしい。この指導を行うには、  
単元指導計画段階で、推敲の時間を多めに位置  
付けるなど、時間をきちんと確保することや、  
生徒に語彙力を増やす指導を日常的に行ってい  
くことが必要である。



## 書くことⅠ「確かに書く」こと部会研究発表 研究主題

相手・目的・場面状況に応じて、「確かに書く」能力の育成

～分かりやすく・説得力のある文章を書くことができるための指導の在り方～

発表者：水野 寛大（瑞浪市立瑞浪中学校教諭）

司 会：郷田 賢（恵那市立恵那西中学校教諭）

記 録：谷口 順子（多治見市立多治見中学校教諭）

伊藤 瞳（多治見市立北陵中学校教諭）

小島光太郎（恵那市立恵那東中学校教諭）

部 長：伊藤 雄樹（岐阜市立本荘中学校教諭）

指 導：松井紀史朗（中津川市立第二中学校校長）

助 言：伊藤 政之（東濃教育事務所課長補佐）

### 1. 提案の趣旨

単元前に実態調査を行ったところ、多くの文章の文末は、「と思う」となっており、主観的な文章を書く生徒が多いことが分かった。この生徒たちに、具体的な事例や数値などを用いたり、反論を想定した上で、意見を述べたりするような、説得力のある文章を書く力を付けたいと願った。しかし、生徒たちの中には、「何のために書くのか」「何を書くのか」「どう書けば良いのか」に困り感をもっている生徒が多くいることが分かった。

そこで、恵那市大井振興室の鈴木室長に、恵那市の人口減少について講話をしていただき、恵那市の人口が、平成17年時点で55000人から、平成47年度には、38900人程度まで減少していく見込みであることや、人口が減少することでどのような影響があるのかを語って頂いた。その上で、単元名を「恵那市に人を呼び込むための中学生の提言 ～STOP！恵那市の人口減少～」とした。

また、前述したように、「何を書くのか」に困り感をもつ生徒に対して、単元内で、パネルディスカッションを行い、恵那市に人を呼び込むために、どんなことができそうかというアイデアを得ることができるようにした。

さらに、「どう書けば良いのか」に困り感をもつ生徒に対して、良文（モデルとする文）と悪

文（反面教師とする文）の2種類を比較する中で、生徒が説得力のある書き方を見つけるといふ主体的な学習を生み出そうと取り組んだ。

### 2. 研究討議

Q. パネルディスカッションを取り入れたメリット・デメリットは何か？

A. デメリットは正直感じていない。たくさん視点から自分の意見を広げたり、深めたりすることに有効だった。また、書くプロセスとパネルディスカッションのプロセスには、相通じる部分がある。特に、「こんな反論がありそうだ」と後に書き加える反論想定の部分まで思いを巡らすことができたことがメリットである。

Q. 例文を比較する時に、シンプルで稚拙な文章の方を「分かりやすい」と捉える生徒もいる。そういった生徒にどのような手立てを講じると良いか？

A. 自分の伝えたいと意図したことを、相手が分かってくれたという喜びや体験が必要だと考える。そのための体験を味わわせたり、内容を吟味したりする学習も取り入れていきたい。

### 3. 指導助言

東濃地区全員で取り組んだ実践である。社会生活の題材として、自分たちの未来のことを取り上げ、書くことに魅力や必然性を与えることができた。また、モデル文の提示は、書くための方法をもつことができない生徒への有効な手立てとなった。今後は、「働き方改革」としての一部として、今回の実践をカリキュラム化し、学校の中で来年度以降も実践できる再現性の強いものにしていくと素晴らしい。

書くことⅠ「確かに書く」こと部会研究発表  
研究主題

魅力的な紙面を演出することを通し「確かに  
書く」力を育成する実践

～地元長浜をPRする観光冊子の編集から～

発表者：大久保明博（滋賀県長浜市立東中学校教諭）

司会：郷田 賢（恵那市立恵那西中学校教諭）

記録：谷口 順子（多治見市立多治見中学校教諭）

伊藤 瞳（多治見市立北陵中学校教諭）

小島光太郎（恵那市立恵那東中学校教諭）

部長：伊藤 雄樹（岐阜市立本荘中学校教諭）

指導：松井紀史朗（中津川市立第二中学校校長）

助言：伊藤 政之（東濃教育事務所課長補佐）

### 1. 提案の趣旨

単元前に「書くこと」に対するアンケートを行ったところ、過半数の生徒は、「嫌い」と答えた。その理由は大きく4つあった。「なぜ、書くのか分からない」「何を書けばよいか分からない」「どうやって書くとよいか分からない」「まとめ方が分からない」の4つである。

「なぜ、書くのか分からない」と、書く目的を見つけることができない生徒のために、「滋賀県観光入込客数」「平成24～27年度の滋賀県入込客数ベスト30（施設）」「平成24～27年度長浜市観光入込客数」のデータを配布した。その上で、自分たちが長浜市観光協会広報課の一係であることを伝え、データから読み取れる観光における問題点と、その問題点を解決するアイデアを出すように指示した。そうすることで、「このままでは、長浜市が危ない」「自分たちで何かせねば」という必然性を抱くことができ、その上で、「長浜をPRする冊子を作る」という言語活動を設定した。

また、「何を書けばよいか分からない」生徒のために、「同心円マップ」を、「どうやって書く」とよいか分からない生徒には、長浜市各戸に配布されている「ぼてじゃこ倶楽部」という本物の資料をもとに効果的な記述の在り方を学習するようにした。さらに、「まとめ方が分からない」生徒のために、集まった情報の最もPRすべきことを一番上、次にPRすべきことを

二番目と、重要度をランキング付けする「ピラミッド図」を思考ツールとして与えた。

### 2. 研究討議

Q. 思考ツールとして、「同心円マップ」と「ピラミッド図」があるが、違いは何か？

A. 「同心円マップ」は、調べるべき情報や得た情報をカテゴライズするために使用した。最初の円には「食べ物・グルメ」、次の円には「施設」、最後の円には「イベント」などといったカテゴリーに分けながら、長浜のPRポイントを書き出し、「何を書けばよいか」を考えるツールとした。「ピラミッド図」はその中で、一番は何なのかという重要度をはっきりとさせるために使用した。

Q. 最初に作成したPR誌に比べて、単元終了後のPR誌の方が、圧倒的に見やすく・分かりやすい。有効と感じた指導は何か？

A. 本物の雑誌を用いて、雑誌のどこがよいかや、自分のPR誌のどこを直すかよいかを考えさせることが有効だったと考えている。

### 3. 指導助言

書くことへの抵抗感を少なくするために、様々な資料を与え、自分で課題を考えることを通して、書く必然性を与えている。また、考えを分類し、整理させるために、様々な手法を用いている。さらに、実際の刊行物を用いて、「簡単に」「詳しく」をどのように書き分けているかを指導している点が素晴らしい。今後は、思考スキルの特性を踏まえて、思考ツールを使っていくとさらによい。

## 目的や意図に応じて、表現豊かな文章を書く能力の育成

～多彩な表現や個性的な表現を駆使し、主観性の高い文章を書く指導の工夫～

単元名：「ある日の自分」の物語を書こう  
～表現のしかたを工夫して書く～  
授業者：野々村琢磨（岐阜大学教育学部附属中学校教諭）  
司会：桃瀬 寛明（各務原市立那加中学校教諭）  
記録：原 博一（羽島市立中央中学校教諭）  
部長：野島 将也（高山市立日枝中学校教諭）  
指導：長村 覚（岐阜市立長良中学校校長）  
助言：富山 哲成（岐阜県教育委員会課長補佐）

### 1 単元及び授業の概要

事実を羅列するような文章になったり、自分の感情をうまく表現できていなかったりする生徒の実態を受け、本単元を通して、「自分の思いや感情を多様な表現の中から言葉を選び、思いや感情を明確にしたり深めたりする能力」を高めることを目指した。

「走れメロス」を読み取る活動を通して描写の工夫を学び、言語活動として位置付けた「保護者に向けて文化祭で行う劇の取組の様子を物語調で書く」ことに生かした。

本時は「人物の心情を描写した表現について、意図を明確にして読み手に伝わる表現に推敲することができる。（B－エ）」というねらいを設定した。個々の課題意識を解消し合える三人グループを捉えた実態をもとに編制し、「読み手の感じ方を知り、自身が推敲すべき表現を明確にする交流」を行った。ここで明確にした「読み手への伝わり方」をもとに、「走れメロス」で学習した表現の工夫をまとめたプリントや類語辞典などを活用して、意図を明確にして推敲させた。

推敲する際、描写の工夫の仕方で悩んでいる生徒に対して、「○○さんの、□□の描写の工夫をみてごらん。」「どのような意図で描写を工夫したのか聞いてごらん。」などと声をかけ、工夫した意図を理解し、自身の描写の工夫に汎用的に生かせるようにした。また、「何を使って、どのように工夫したのか。」を、それぞれ異なる考え方で推敲した生徒を指名し全体に広めた。

授業の終末では、推敲した意図を明確にして振り返るように指示し、実生活の場で生かせるようにした。

### 2 研究討議

- Q. 三人のグループをどのように編制したのか。
- A. 前時に書きまとめた生徒一人一人の下書きから、その生徒が用いる表現上の工夫の特徴を捉え、互いにもち得ていない表現上の工夫を学び合えるグループを意図的に編制した。
- また、工夫した表現が読み手に伝わるか不安を抱いているところを明確にさせ、それを解消し合えるグループを編制した。編制する際には、交流活動が円滑に進められるようにするために、生徒同士の人間関係や、進行役の位置付けなどを配慮した。
- Q. 指導案上に、「必要に応じてヒントカードを配付する」と書かれていたが、どのようなヒントカードを配付しようとしたのか。
- A. 生徒たちの課題意識に対する答えを予め考えておいた。カードには、その答えに導くためのヒントとなる他の生徒たちの表現上の工夫を記しておき、机間指導の際に「どのような意図でそのような表現を用いたのか聞いてごらん。」と伝えながら渡した。
- Q. 本単元で設定した言語活動では、伝える相手を「保護者」としていた。保護者の実態を捉え、どのような表現を用いることがより伝わるのかを吟味する必要があったのではないか。「学級の仲間」を伝える相手として設定した方がよかったのではないか。
- A. 確かに、保護者にとって伝わりやすい表現とはどんな表現なのかを吟味する必要はあった。一方で生徒たちは、文化祭で行う劇の取組の様子を保護者の方に伝えたいという願いをもっていた。物語を書く目的と必然

をもたせる上で、やはり保護者に向けた物語を作らせたかった。

- Q. 研究の一端として「個に応じた指導」を行っているが、なぜこのことを行う必要があると感じられたのか。
- A. 平成27・28年度の全国学力・学習状況調査の経年変化を見てみると、書くこと領域における正答率は高まったが、一方で「無回答」の割合が20%を上回る設問があった。書ける子と書けない子の二極化が甚だしくなっていることがわかる。特に後者の中には、はじめから書くことをあきらめている子がいることがアンケート結果からわかった。単元に入るにあたって、書く目的と必然を生徒たちにもたせ、全ての生徒たちに「書けてうれしい。」という思いに立たせることが大切だと感じた。

#### その他の意見

- 20分間の交流の時間は長いのではないかと思っていたが、「伝わり方の交流」、「描写の工夫の意図の交流」、「推敲」という活動を考えると、丁度よい時間だったと言える。生徒たちは、時間一杯話し合い、伝わり方を確かめ合っていた。意図的なグループ編制が活かされていたと感じた。
- もともと自分の描写に納得している生徒が、仲間からの「伝わり方」を聞いて改善を図ろうとする姿が見られた。「伝わり方」を伝える生徒が、なぜそう伝わったのか、根拠を明確にして伝えていたからこそ、本人も納得して聞き入れることができたのだと思う。一方で、どんなに明確な根拠を伝えても、頑なに自分の表現を省みない生徒もいた。果たしてその生徒は、授業を学ぶ必然をもっていたのかどうか疑問に思う。
- 今回の授業は、まるで、表現を改める小説家と編集者のやり取りのように感じたい。「ピンクのゼラニウム」と言う表現にこだわりをもっていた生徒は、仲間からのアドバイスによって、その表現を削除してしまった。「読み手に伝わりやすいか。」というアドバイスの視点のみならず、表現者の思いも重視して交流してもよかったのではないかとと思う。交流の時間

が均等であれば、もっと表現者の思いをグループで共有できたのではないか。

• 描写の仕方や言葉の選び方でいうと、今回は言葉の選び方に重きを置いた授業であった。「走れメロス」を学ぶ際に、「内容面」「表現面」「構成面」の三つの観点から描写の工夫の上手さを味わわせても面白かったのではないだろうか。「メロスは怒った。」と「メロスは激怒した。」にはどんな伝わり方の違いがあるのか。このような言語操作を通して、語感を磨き、自身の文章に生かせるようにしたい。

### 3 指導助言

#### <成果>

- 今回の実践で、「豊かに書くこと」の具体を示していただいた。強ち、文章を書く授業では意見文や批評文を書く授業に偏ってしまう傾向がある。これらは形式的に教えていくことができる文種である。しかし、学習指導要領では、文学的文章を書くことを通して、創作を指導していくことが明記されている。これらにつながる提案だったのではないか。
- 「読み手に伝わる描写を工夫する」という指導の中心が、単元を通して貫かれている。それによって、生徒たちは「もっと読み手に伝わる表現にしたい。」という思いに立って授業に臨んでいた。

#### <課題>

- 評価の方法をより明確にしていきたい。どのような目的でどのように直せばよかったのかということ、生徒たちに明確にさせることが大切である。本時のねらいから考えてみると、自分がどんな目的でどのような意図があって表現を工夫したということが、一人一人言えればよいと考える。このような考えから、意図に応じて表現を換えたり、工夫したりすることを考えたときに、保護者に向けて書くという相手意識がよかったのかどうかを考えていく必要がある。

研究テーマ：目的や意図に応じて、表現豊かな文章を書く能力の育成～多彩な表現や個性的な表現を駆使し、主観性の高い文章を書く指導の工夫～

発表者：深尾 寛（山県市立高富中学校教諭）  
矢田貝和志

（鳥取県西伯郡南部町立法勝寺中学校教諭）

司 会：桃瀬 寛明（各務原市立那加中学校教諭）

記 録：原 博一（羽島市立中央中学校教諭）

部 長：野島 将也（高山市立日枝中学校教諭）

指 導：長村 覚（岐阜市立長良中学校校長）

助 言：富山 哲成（岐阜県教育委員会課長補佐）

## 1 提案の概要

### 【岐阜県 深尾教諭の提案】

相手を意識して書くことに課題がある生徒たちに、「宿泊研修でお世話になった方々に手紙を書く」という言語活動を位置付けた単元を設定し、「言葉の使い方や表現の仕方を工夫して、相手が読みやすくわかりやすい文章を書く力」の獲得を目指した。

### <研究内容①『単元の付けたい力』に即した言語活動を位置付けた単元指導計画の作成]>

単元指導計画を立てる際に、各単位時間における生徒の意識を予想し、各単位時間の関連を明確にしたり、生徒の単位時間の言語活動に向う意欲を高めることにつなげたりした。また、予想した「生徒の意識」と、毎時間の生徒の振り返りを照合することで、教師の意図と生徒の意識のずれが生じた場合、単位時間の導入でそのずれを修正するような言葉かけをして学習に向わせることを大切にしたり、「この言語活動を通して、自分の手紙がもっとよくなっていく。」という意識に立たせることで、「学ぶ目的と必然」をもたせて言語活動に向わせるように工夫した。

### <研究内容②「1単位時間の指導事項の明確化」>

単元の導入時では「単元シラバス」を配布し、教師の指導意図と生徒の意識の共有を図った。この「単元シラバス」には、「単元の目標」「単元の言語活動」「『ねらい』と照合させた『学習活動』」を明記した。生徒は、この「単元シラバス」を用いて、単位時間の振り返りを「本時の振り返りと次時に向けて」として書きまとめ、言語能力の高まりを実感したり、次時への意欲を高めたりすることができた。

### <研究内容③「生徒の『書くこと』に対する実態分析のあり方」>

重点指導事項に定めた「推敲」の時間では、前時までに明らかにした、生徒一人一人の表現の仕方における目標をもとに交流するペアを編成し、互いの課題意識を解消し合えるようにした。単元の終末では、下書きと清書を「相手意識」という視点から比較させ、書けるようになった喜びを実感させることができた。

## 2 研究討議

Q. 研究が緻密であり、39人の意識を想像し、一人一人の生徒に適した指導であると感じたが、個人目標（課題意識）を全員がもてるようにする指導の手立てが知りたい。

A. 授業の終末に書いた「振り返り」に、「さらに相手にわかりやすく伝わる表現にするためにはどうすればよいか。」などのアドバイスを朱書きし、方向付けている。また、「単元シラバス」を通して次時の学習内容を理解させ、次時の授業でどのようなことを学びたいのかを明確にさせた。

Q. 次時の課題や目的を明確にして授業に臨めない生徒についてどう対応しているのか。

A. 教師が個別に指導している。意欲的に取り組めない生徒のみならず、授業の時間内に書きまとめきれない生徒にも休み時間などを活用して個別の指導をしている。

Q. 生徒の意識と能力の二つを分析して指導に生かしているところは大変素晴らしいが、全国学力・学習状況調査の「書くこと」領域における無回答率が20%を超えている現状があり、すぐに成果を上げることは難しいと思われるが、長期的な指導の方針はあるか。

A. 特に「書くこと」の領域においては個人の能力差が顕著に表れるため、捉えた生徒の実態をもとに、個に応じた指導を積み重ねていくことが必要になる。また、生徒の学びの変容を把握し、書けるようになった喜びを味わわせていくことも必要になると考える。

#### その他の意見

- ・単元を実施する前に、宿泊研修の振り返りから生徒の意識を分析し、生徒一人一人の「言葉による見方・考え方」を捉えている。さらに、各単位時間の生徒の実態を振り返りから捉え机列表に残し、そこから個人目標を立てさせる方が大変すばらしい。

#### 【鳥取県 矢田貝教諭の提案】

場面や状況に合わせて描写を工夫し、生き生きと表現する力を身に付け、実生活の場で生かしてもらいたいと考え、以下の三つの実践を行った。

#### <①小学校で学習した文学的文章などに出てきた効果的な描写について学ぶ>

小学校で学習した文学的文章の中で出てきた効果的な描写を取り上げ、その意図や工夫について話し合った。該当箇所を空欄にし、どんな言葉が入るかを考える活動も取り入れながら、他の表現と比較して描写の意図や工夫を捉えさせた。

#### <②結びの文に合わせた創作文を書く>

題材探しの苦勞から生徒を解放し、書くことへの抵抗感を軽減するため、結びの文を4つ提示し、いずれかを使った創作文の構想を考えた。書き手が自分の表現を自分の力で振り返られるだけでなく、交流の際、読み手が短時間で内容を理解したり、書き手の思いや意図を受け止めたりできるようにした。交流する論点を絞ったことによって、一つの表現について意図や効果を吟味し合うことができた。

#### <③作品を読み合い、描写の工夫について意見や感想を伝え合う>

交流活動として、他の班の作品を回し読みした後、自分の班内で互いの作品に対する意見や感想を書いた。書き手が工夫したと述べた箇所だけでなく、それ以外の表現についても、読み手なりに捉えた意図や効果を伝えるコメントが多かった。

仲間からもらったコメントの中には、工夫した表現を賞賛するものも多くあり、書くことに対する抵抗感を軽減することにもつながった。

## 2 研究討議

- Q. 小学校で学ぶ文学作品の表現を用いて授業を行った意図は何か。
- A. 簡単な表現を用いても、工夫できるということを教えたかった。また、生徒の実態から考えても、「わかりやすさ」に重きを置いた。

- Q. 実践にあった「描写の工夫」を、どのように評価するのかについてはとても難しさがあると思う。生徒がどのような思いで、どのように表現を工夫したのかを捉えた上で評価しているのかどうか知りたい。

- A. 「構想プリント」を生徒一人一人がどんな思いをもって工夫したのかがわかるようなものにしておかなければならなかった。意図を明確にして工夫したかどうかという岐阜県の実践発表を聞いて、そのような評価方法こそが大切であることがわかった。

#### その他の意見

- ・案内文や文学的文章は実生活の場であまり用いられないと思う。生徒たちは案内文や文学的文章を書く必要性をあまり感じないのではないかな。だからこそ、学ぶ必然のある言語活動を位置付けていく必要があると思う。これらの文種を扱う授業において、どのような言語活動を位置付けていく必要があるか一考すべきだと思う。
- ・最近のニュースで「小学生の暴力件数の増加」が取り沙汰されている。ある学者によると、自身が抱く気持ちを言葉でうまく表現することができず、伝わらないもどかしさを感じ、「暴力」という形で表現してしまうことがあるらしい。私たちが取り組んでいる「豊かな表現」の研究は、そういった実生活の中で起こり得る切実な問題にも直結している。豊かな表現を学ぶことは、豊かな心を育てる一助となるのではないかな。

## 3 指導助言

- ・指導内容が曖昧になりがちな描写の工夫の学習で、生徒が何をするのか、どうなればよいのかをしっかりと考えられている実践であった。
- ・カリキュラム・マネジメントをより一層充実させ、教科で身に付けた能力を他の教科で生かせるようにしていくことも大切となってくる。
- ・今後、自分一人の力で文章が書けるようになるために、年間を通して計画的に指導を位置付けていくとともに、教師が与える支援を、徐々に減らしていくことが大切である。授業で学んだことを実の場で生かせるようにしていくことこそ、社会生活を生きていく上で大切な力である。一連のことを自分でできるようにしていくことが大切である。

## 言語活動を通して、主体的・目的的に読む能力の育成

～構成や論理展開の意図や効果に着目し、説明的文章を正確に読み解くための指導の工夫～

**題 材：**布施さんに挑戦  
～君は「最後の晚餐」を知っているか～  
**授業者：**北原 章大（岐阜市立陽南中学校教諭）  
**司 会：**渡辺 孝充（大垣市立東中学校教諭）  
**記 録：**笠井 章子（大野町立大野中学校教諭）  
小林 静香（安八町立登龍中学校教諭）  
**部 長：**小宅 陽久（岐阜市立東長良中学校教諭）  
**指 導：**香田 静夫（輪之内町立輪之内中学校校長）  
**助 言：**馬淵 尚美（西濃教育事務所課長補佐）

### 1. 研究の構想と本単元のねらい

平成28年度「全国学力・学習状況調査」における本県の実態や授業校（岐阜市立陽南中学校）の状況から、文章の中心的な部分と付加的な部分との役割の違いを考えて読んだり、自分の考えを形成したりする力に弱さが認められた。特に、考えの形成については、日々の授業の中でも「～すごいと思った」「～なるほどと思った」というように簡単な感想を述べるに留まることがあり、自分の体験や表現効果、語感といった様々な視点を根拠に、論理的に考えを形成するまでには至っていないことが分かった。そこで、生徒たちには比較することや関連付けることを通して、自分の考えを筋道立てて形成する力を身に付けさせようと考えた。

説明的文章を読む際、生徒たちはまず文章の内容を正しく理解しようとする。そして、表現や構成、展開を拠り所に筆者の主張について自分なりに考え解釈する。その上で、読み取って得た知識やものの見方、考え方を日常生活や他の学習で活用したり、さらに広げたり深めたりしようと、新たな文章に相対していく。このように、文章の内容を適切に理解した上で、あたかも筆者と議論するかのように自分の考えを深めていくという読み取り方に読書の魅力の一つがあると言える。

本教材「君は『最後の晚餐』を知っているか」では、レオナルド・ダ・ヴィンチの名画「最後の晚餐」を筆者は「かっこいい」と評した上で、その理由を説明するために、「解剖学」「遠近法」「明暗法」といった医学や建築に用いられる手法を取り上げ、それらを「絵画の科学」と称して論理的に説明している。このように説明的文章や絵画の批評において、あまり使われない表現を用いることや絵画を緻密な視点で詳細に分析し、説明する点に筆者の着眼点の鋭さが表れている文章である。

本単元では、筆者の「物事を分析的に見る」というものの見方、考え方を適切に理解するとともに、共感できるか否かで筆者と「議論」という言語活動を設定した。生徒一人一人が筆者のものの見方、考え方に対する自分の考えを形成するためには、筆者のものの見方、考え方を適切に理解し、筆者の人物像や作品の背景といった視点からも教材を捉える必要がある。優れた美術評論家である筆者と、表現を根拠に「議論」することで、自分のものの見方、考え方を広げたり深めたりする力を身に付けることができるよう、次のとおりねらいを設定し単元の学習を構想した。

#### 【単元のねらい】

- 最後の晚餐を「かっこいい」と評した意図として、解剖学、遠近法、明暗法といった「絵画の科学」を用いて説明していることや、筆者の「物事を分析的に見る」というものの見方、考え方について適切に読み取ることができる。
- 筆者のものの見方、考え方について、自分の知識や経験とつなげて考えを形成することができる。

また、「生きてはたらく言語能力」を育成する

ために、前述の生徒の実態と本単元の特性を生かし、「自分の知識や経験を筆者のものの見方、考え方とつなげて考えを形成する力」を生徒に身に付けさせたいと考えた。本時の授業において、考えを形成する場面では、「物事を分析的に見る」というものの見方、考え方が自分にもあるかについて、日常生活など具体的な場面を想定して考えることができるようにした。また、個人追究の場面では、具体的な自分の知識や経験とつなげているかを確認し、分析的なものの見方、考え方の良し悪しや好き嫌いに終始しないようにと助言したり、自分の知識や経験とつなげることができるように、「部活動では」「買い物をするときには」という具体的な場面を指定したチャートを示したりして、一人一人が自分自身のものの見方、考え方について想起できるようにする手だてを講じることで、授業のねらいに迫ろうとした。

## 2. 研究討議（質疑応答）

Q 1. 課題設定ではどのようなことを意識しているか。

A 1. 本時は、自分の考えの形成に重点を置く時間と考え、「布施さんの分析的なものの見方、考え方について、自分の考えをもとう」という大きな課題をあえて設定したが、そういう場合はどうやったら課題を達成できるのかを示す必要がある。評価規準が明確になり、生徒と共有できることが大切である。

Q 2. 生徒は本単元にどのような意欲をもって臨んでいたのか。

A 2. 本文中から筆者のものの見方、考え方を適切に読み取るだけでなく、それについて共感できるかできないか、賛成か反対か、自分との共通点や相違点などを視点に、考えを形成できるようにすることが大切だと考えた。筆者と自分の考えを対比したり、置き換えたりすることによって、自分の問題として捉えることができ、主体的な学びを生み出すために必要な力であると考え、本単元を構想した。

Q 3. 「自分の考えを形成する」ことをどのように評価したらよいか。

A 3. 中学校学習指導要領・解説の第2学年「C読むこと エ」には、「文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと」とある。筆者の分析的なものの見方、考え方について、知識や経験を根拠に自分の考えをもっているかが評価の視点になると考えている。

Q 4. 生徒たちは活発に意見交流を行っていた。課題に対して自分の考えをもったり、仲間と議論したりする際にどのような手だてを講じているのか。

A 4. 自分の考えを形成するために、学習プリントにシンキングツール(思考ツール)を必要に応じて活用できるようにしたり、筆者の別作品を生徒に提示して読み、筆者の考え方をつかんだりするなどの手だてを講じた。国語では生徒同士が対話すること、教材文を深く読み込むことを大切にしている。

## 3. 指導助言

本県では、全国学力・学習状況調査において「考えの形成」に関する問題は、全国平均を上回っている。これは、「考えの形成」を大切にしたい実践をしてきた成果である。本授業も確かな読みを自分の考えの形成に結ぶ学習であった。確かな読みがあってこそ主体的、意欲的な学びが生まれる。単位時間の学習が単元の終末につながっていて、生徒は言語活動を常に意識しながら学習を進めていた。全体交流での教師の投げかけや生徒同士のやりとりの中で疑問を解決しながら課題に向かっていった姿はまさに主体的な学びであった。自分の考えをつくる場面では、筆者の文章の良し悪しに執着しないようにすること、教材文に立ち戻り根拠とすることに配慮しながら、具体的な場面で考えていくことを意識したい。それが、学習指導要領にある「知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと」である。言語活動に決まりはなく、生徒の実態を的確に把握して適切な言語活動を設定し実践を積み重ねていくことが大切である。

## 読むことⅠ 説明的文章部会実践発表

発表者：児玉 岳（池田町立池田中学校教諭）  
          栃木 昌晃（世田谷区立太子堂中学校主幹教諭）  
司 会：渡辺 孝充（大垣市立東中学校教諭）  
記 録：笠井 章子（大野町立大野中学校教諭）  
          小林 静香（安八町立登龍中学校教諭）  
部 長：小宅 陽久（岐阜市立東長良中学校教諭）  
指 導：香田 静夫（輪之内町立輪之内中学校校長）  
助 言：馬淵 尚美（西濃教育事務所課長補佐）

### 【児玉岳教諭（池田町立池田中学校）の実践】

#### 1. 提案の趣旨

平成28年度全国学力学習状況調査を分析すると、説明的文章の構成を捉える問題において誤った解答をした生徒の割合は全体の15.7%であった。これは、段落の役割や相互の関係を正しく読み取れていない生徒が約3割いたということである。そこで、これまでの読むこと部会の歩みを踏まえ、研究テーマを「言語活動を通して、主体的・目的的に読む能力の育成～構成や論理展開の意図や効果に着目し、説明的文章を正確に読み解くための指導の工夫～」とした。そして、①主体的・目的的な学びを生み出す単元構成の工夫、②学習の目的や視点を明らかにする導入の工夫、③説明的文章を読み解くための指導・援助の工夫、④読みの確かさ実感するための単元の終末の工夫の4点を柱として、西濃地区の教員と共に実践を行った。

#### 2. 実践の概要

##### (1) 主体的・目的的な学びを生み出す単元構成の工夫

生徒が主体的・目的的に学習できるよう、単元構想や単元の出口で行う言語活動を単元導入時に生徒と共有した。言語活動は、「生きてはらたく言語能力一覧表」をもとに具体化することで、課題意識を単元終末まで貫けるようにした。

##### (2) 学習の目的や視点を明らかにする導入の工夫

単位時間の導入において、前時までの学習や既習事項を活用できるようにするため、掲示物を活用して生徒の学習を連続したものにした。

##### (3) 説明的文章を読み解くための指導・援助の工夫

説明的文章を読み解くにあたって、生徒一人一人の実態に応じた指導・援助を行った。生徒の実態については、レディネステストなどの結果分析だけでなく、読み取りにおける思考の図式化を行うことで、どの部分につまずきがあるのかを具体的に明らかにした。

##### (4) 読みの確かさを実感するための単元の終末の工夫

単元を通して読み取ってきたことの確かさを実感させるため、教科書教材と同題材で書かれた他作品と読み比べることとした。

#### 3. 研究討議

- ・教科書教材に加えて同筆者の他作品を提示したり、並行読書を行って読み比べたりすることで本文の読み取りが一層広く深いものになる発展的な読書や日常生活へとつなげたい。
- ・単元の目的をはっきりさせることが生徒の学習に取り組む主体性を育むことになる。教材文を通してどんな力を付けたいか、何を学ばせたいかを明確にして指導する必要性がある。

#### 4. 指導助言

公開された研究授業と西濃地区の実践に一貫性が感じられ、西濃地区全体で説明的文章の指導改善に取り組んできたことがよく分かった。生徒の実態、付けたい力を生徒目線で捉え直し、生徒の願いを出発点にした実践であり、これによって生徒は学習への満足感を味わっている。また、実践発表から、①願いや見通しの共有、②目的の共有、③自己の変容の自覚を促す評価の在り方の3点について成果が認められた。特に、目的や学習の見通しを生徒と共有することについては、学習指導要領の指導事項を確実に踏まえた上で、適切な言語活動を設定し、生徒の読み取りが主体的で目的的なものになるようにと留意したい。

## 【栃木県立宇都宮東中学校（世田谷区立太子堂中学校）の実践】

### 1. 提案の趣旨

平成28年度全国学力・学習状況調査報告書や、平成29年6月に示された『学習指導要領・解説』を踏まえ、東京都中学校国語教育研究会第四分科会では、「多面的・多角的な視点で文章を読み、考えを広げ深める指導法の工夫」というテーマで継続的に研究を行い、課題解決のために必要な情報を読み取り、活用する力を高める指導法の開発について実践を重ねてきた。今年度は「比べ読みを通して、自分の考えを再構築しよう」という副題のもと、①自問自答型学習活動、②効果的な比べ読みの2点を柱として実践を行った。

### 2. 実践の概要

#### (1) 多面的・多角的な視点で文章を読むために

本実践では、学び手の「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、単元の導入で非連続テキスト（2015年と2040年の人口ピラミッド図）を用いて、社会生活における多様な課題について推論し合う場面を設定した。また、学習を進めるにあたり「私たち人間はどう生きるべきか」という課題意識を生徒全員が共有することで、その後の読みが課題解決に向けた主体的なものとなり、授業における対話活動も活性化させようと考えた。また、主教材である河合雅雄著『若者が文化を創造する』（学校図書『中学校国語2』）を読み進めるだけでなく、課題解決に向けての学び手の視点をさらに多面的・多角的なものにするために、比べ読みの補助教材として、山極寿一著『ゴリラは語る』（講談社）など、題材やテーマが主教材と類似している他の文章を用いた。

#### (2) 考えを広げ深めるために

本実践では、学び手はそれぞれの補助教材について、班内で分担し読みを深めた。それぞれが書き手の目的や意図を意識して読んだ後、それまでの自分の視点や考えを広げたり、深めたりすることをねらいとしたジグソー学習的手法で交流活動を行った。さらに、単元の終わりにそれぞれの考えや提案を書き手に伝える「手紙」

という形で文章化することによって、書き手との対話を意識しつつ、より深く書き手の主張に迫る試みとなった。主教材の初読の際に著した考え、記録に用いたワークシート、まとめとして書き表した手紙文の内容を生徒自身に振り返らせることで、自己の変容を評価できる力を身に付けさせることを目指した。こうした学習過程が「主体的・対話的で深い学び」の基礎をつくると考えたからである。

### 3. 研究討議

- ・自問自答型学習を取り入れ、初読の段階で多くの疑問を生み出し、学習課題として生徒と共有していくことで、自ら問いを立て主体的に学びに向かう生徒を育てることにつながる。
- ・補助教材について班内で分担し読みを深めた。仲間の考えを取り入れることで読みを強化することができる。できれば国語学習の班を編成し、互いにフォローし合いながら読みを深めていくことを大切にしたい。

### 4. 指導助言

単元で取り上げる言語活動とどのように出会わせるかが大切になる。単元全体のテーマやどのように学ぶかという見通しを生徒と共有することで学習への必然が生まれ、学習がより主体的なものになる。また、適切な補助教材を利用できるよう、教材研究によって良書を選定したい。小集団学習については、読み取りの視点や方法を明確にするとともに、学習が成立するように、生徒の学習状況に応じた手だてを講じることが大切である。



## 言語活動を通して、主体的・目的的に読む能力の育成

～作者の表現意図に迫り、豊かに想像する力の高まりを実感できる文学的文章の指導の工夫～

単元名：社会に生きる自分を見つける

～「故郷」～

授業者：山田 優貴（岐阜大学教育学部附属中学校教諭）

司会：古川 寛之（関市立緑ヶ丘中学校教諭）

記録：中田 哲朗（美濃市立美濃中学校教諭）

部長：上村 光一（郡上市立大和中学校教諭）

指導：片桐 一男（郡上市立白鳥中学校校長）

助言：高橋 友之（美濃教育事務所指導主事）

### 1. ねらい

読むことの授業では、描写を根拠に登場人物の心情を読み取るなど、内容を理解することはできている。しかし、内容の解釈はできても、それを元にして自分の考えを持つ際には、自分の体験に偏っているため、知識を広げたり、自分の考えを深めたりする姿が少なく「自分の考えの形成」に関しては弱さを感じた。

このような実態を踏まえ、文章を読んで「状況を捉え、人の生きる姿や社会」についてキャリア教育とも関連させた単元を通して考えさせ、そこから生まれた自分のものの見方や考え方を他の生徒と学び合わせることによって、「自分の考えの形成」の力を高めていきたいと考えた。

そこで、4月の段階から文学的文章教材とキャリア教育との関連性を意図した単元を仕組み、「自分の考えの形成」を意識した読むことの授業に、発展的に取り組んできた。

今回の単元では、「故郷」を読み、当時の中国の人々の置かれた状況や社会とのつながりを学んだ上で、「自分たちは社会とどうつながっているのか」という大きなテーマで「自分の考えの形成」の場を設定した。そして、類似した各自のテーマをもった仲間と考えを伝え合うことを通して、生徒一人一人が新たな視点をもったり、考えを再構成したりすることで、より深い考えを形成することを実感できると考えた。

### 2. 研究討議

- Q. グループ分けをどのようにして行ったのか。また小集団での学習方法について普段どのように指導しているのか。
- A. 各自のテーマの表現が異なっても、内容が似ていると授業者が判断した生徒同士をグループ化した。生徒の学力差があるため、どの生徒にも学習が保障されるよう、各グループには話し合いをリードできる生徒を位置付けた。また、小集団での活動は、普段は3人1組を基本としている。今回は、より多くの仲間に考えを聞いてもらうことを意図したため4人グループとした。
- Q. 本時は単元の終末の時間であったが、オープンエンドで終了している。白熱したグループの話し合いの結果をどのように全体に返していくのか。
- A. 本時達成したい目標は、「もう一度考え直す」「新たな視点をもつ」であった。評価との関わりから、本時の最後に条件をつけたまとめを書かせた。よって仲間の考えから自分の考えがどう変わったかを実感できていれば、考えの深まりが達成できたと考えている。全体への返し方については、「グループ討議の中で本文に関わることはなかったか」などの教師からの問い返しを設けるといった手だてについて今後も検証が必要であると感じている。
- Q. 考えの根拠はしっかりしていたと思うが、考えに偏りが出たグループもあったように感じた。どのようにフォローしていくとよいか。
- A. 同じような考えで集まっているからこそ起きてしまうことであると考え。録音してはいるが、その場で確認していくことは難

しいと感じた。国語の授業においては、価値観を追究するのではなく、ねらいを達成できていたかで判断している。

Q.「故郷」は時代背景を理解していないと、読み取りも難しい教材。当時の時代背景をどのようにして共有してきたのか。

A. 調べ学習の時間を確保するのは難しいため、時代背景等を簡潔に説明した資料を作成している。また、毎時間の読み取りの中で、時代背景等についての生徒の疑問を大切に、その場で確かめを行ってきた。

Q. 国語の時間は、流れが明確でないと生徒が集中できないと感じる。普段の授業の中でどのような指導を行っているか。

A. 読み取りの授業では「課題設定→個人追究→全体交流→課題についての振り返り」という流れをパターン化しているが、明確なだけでは飽きてしまう。「そんな読み取りでは先生は納得しないよ」とか「この読みではまだまだだよ」といった教師からの揺さぶりの言葉を与えながら、できたときの認めを欠かさず行っている。

### 3. 指導助言

平成29年は新学習指導要領の移行期間を控え、新たな10年が始まろうとしている節目の年であるが、国語の大方針は不変であること。言語能力を育成する中心的な役割を果たす国語科においては、言語活動を通して資質能力を育成するということが、新学習指導要領においても堅持されているし、さらに重要視されている。今回の実践は、現行の指導要領にのっとった提案である。

#### 【共有したいすばらしさ】

##### 1. 指導事項の重点化が図られている

「この単元におけるつけたい力」を学習指導要領に即して明らかにする、この蓄積が新学習指導要領で示されている、育成を目指す資質能力、「国語で正確に理解し、適切に表現する力」につながっている。本実践では、つけたい力を、3年「読むこと」の「エ 自分の考えの形成に関する事項」に設定し、「故郷」という読み応えがある教材を解釈にとどまらず、考えの形成に

至るようにしている。そのために1学期に「握手」で、3年「読むこと」の「イ」の「解釈」に関する指導をし、その学びを土台にして「自分の考えの形成」の指導がなされている。新学習指導要領は、学習の系統性がさらに重要視されている。学年段階、年間を通して、計画的に、無理なく無駄なく生徒を育てていきたい。

##### 2. 「自分の考えの形成」を重視した指導

中教審答申（H28年12月）「より深く理解したり、表現したりするためには、情報を編集操作する力～（略）」とあるように、自分の考えをもつことで、より良い理解や表現につながる。全国大会の場で「自分の考えの形成」の授業をされること自体、今後の10年を見据えて大きな挑戦。意義深い。こうした挑みがあったからこそ、考えを形成し深めた生徒の姿が生まれた。

##### 3. 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が図られたこと

「主体的・対話的で深い学び」は、新学習指導要領の重要なキーワードである。単元導入時に、単元を通して追究するテーマを自分で考えたため、何を読み取っていけば良いのかが明らかになるとともに、主体的に課題解決に向かう姿が生まれた。自らの課題解決に向けて、何をどう話し合うかということが大切である。終末に、「どのように自分の考えが広がり、深まったか」を実感する場があることで、自分の学びが深い学びになったことが意識される。1単位時間の中だけでなく、単元というまとまりの中で授業改善が図られている。さらに、生徒が学びに向うためにはどうしたら良いかを考え、年間を通じてポートフォリオで綴っていくという長いスパンでの指導もされている。その中で本単元という位置付けが意義深い。

#### 【さらに考えていきたい点】

- 生徒が生きて働く言語活動を実感できる場。
- 本日の生徒は、少し客観的であった。「故郷」は力のある教材。その教材の力を生徒に伝えることも必要であった（解釈の段階での読み深め）。
- 生徒自身が今おかれている状況の中で、今後の社会でどう生きるか考えさせたい。この活動が生きる力の形成につながると考える。

## 読むことⅡ（文学的文章）部会 研究発表①

### 【研究主題】

言語活動を通して、

主体的・目的的に読む能力の育成

～作者の表現意図に迫り、豊かに想像する力の  
高まりを実感できる文学的文章の指導の工夫～

発表者：馬場 多希（関市立桜ヶ丘中学校教諭）

司 会：古川 寛之（関市立緑ヶ丘中学校教諭）

記 録：中田 哲朗（美濃市立美濃中学校教諭）

部 長：上村 光一（郡上市立大和中学校教諭）

指 導：片桐 一男（郡上市立白鳥中学校校長）

助 言：高橋 友之（美濃教育事務所指導主事）

### 1. 提案の要旨

全国学力学習状況調査を分析すると、A問題、B問題ともに、概ねどの項目も全国平均を上回っているが、「適切な情報の収集」「根拠を明確にした考え作り」において弱さが見られることと国語に対する関心・意欲・態度の結果が低く、内容を読み取れていても、表現する際に適切に伝えられていないという状況があることが明らかとなった。

### 【研究主題に迫るための3つの視点】

#### 1 付けたい力と言語活動の設定

岐阜県中学校国語科研究部会で作成した「生きてはたらく言語能力」一覧表の指導事項と照らし合わせて、付けたい力を設定した。授業においては、一単位時間の流れをパターン化し、「課題設定→一人読み→小グループ交流→全体交流→キーワードや条件提示によるまとめ」という手立てを行うことで、生徒が自分の読みが深まったという実感をもつことができた。

#### 2 単元の導入のあり方

単元の導入において、初発に読むときのポイントを示して、題名の意味を考えながら読むことができるようにしたり、初発の感想交流後に単元の出口の活動を示したりすることで、目的をもって読み進めることができるようにした。

#### 3 単位時間の役割の明確化

関市の第2学年「盆土産」の実践では、付けたい力に合わせて単元の言語活動を「作品に描かれている温かさや優しさを紹介するポップを作ろう」と設定した。そこで、一単位時間において、自分が感じた温かさや優しさを書きま

める活動を取り入れ、単元終末の活動に毎時間の読みを生かすことができた。

### 2. 研究討議

Q. 題名読み・ポップ作り・帯作りは、小学校でもやっているが、中学校で気をつけることは何か。

A. 中学生として、表現に着目して、作者の意図を汲んで書くということを意識して指導してきた。

Q. 「主体的・目的的に読む」と言う言葉が引っかかる。どういう読みなのか。「読み手が『こういう目的で読む』ということを目からして読む」「全体で学習するときこんな力をつけるために目的をもって読む」ということなのか。

A. 「主体的」については次期学習指導要領で大切にしている、生徒が自ら学ぶという姿のことである。「目的」とはどんな力をつけるためにどんな言語活動があり、そのためにどんな読み取りが必要なのか。何のために読んでいるのかを生徒自身に明らかにするために、「目的」という言葉を使っている。

### 3. 指導助言

#### 【共有したいすばらしさ】

#### 1. 付けたい力を明らかにした指導の実践

単位時間において、何を学ばせたいかが曖昧になってはいけない。「同じ教材だから、同じ指導で良い」というのは間違い。「読むこと」の「ウ」の生徒の実態は違う。生徒の実態を具体的な姿で捉え、それを元につけたい力を具体的に描くという営みが大切である。

#### 2. 終末における学びの定着の担保

岐阜県は「3つの見届け」（「実態」「学習状況」「定着状況」の見届け）を大切にしている。その中で、「定着状況を見届ける」において、どの子にも定着しているかという点が弱いことが岐阜県の課題。終末にどんなことを学んだのか、「キーワード」「根拠となる言葉」を入れてまとめを書く。また、まとめを書く時間を十分にとり、それを共有させたい。

#### 【考えていきたい点】

言語活動の在り方・充実・創意工夫。

## 読むことⅡ（文学的文章）部会 研究発表②

### 【研究主題】

豊かな言語感覚を育み、学びにつなげる国語科教育の創造 ～第3学年「握手」（光村図書）の実践を通して～

発表者：桐谷 祥平（長崎県長崎市立小ヶ倉中学校教諭）  
司 会：古川 寛之（関市立緑ヶ丘中学校教諭）  
記 録：中田 哲朗（美濃市立美濃中学校教諭）  
部 長：上村 光一（郡上市立大和中学校教諭）  
指 導：片桐 一男（郡上市立白鳥中学校校長）  
助 言：高橋 友之（美濃教育事務所指導主事）

### 1. 提案の要旨

本主題は、来年度開催予定の、九州地区中学校国語教育研究会長崎大会における研究主題である。キーワードは、「豊かな言語感覚」と「学びをつなぐ」である。「豊かな言語感覚」とは、言葉の微妙な意味の違いや美醜などを感じ取る感覚であり、その感覚を豊かにすることで、国語の力を高めていくことができると考える。また、「学びをつなぐ」とは、個人内での既習と未習の学習内容をつなげたり、他者との考えをつなげたりすることである。

### 【研究主題に迫るための3つの視点】

#### 1. 学習課題を設定する

学習課題は、第1フレーズ（指導事項）、第2フレーズ（思考操作）、第3フレーズ（言語活動）の三文で設定する。本事例では、登場人物の人物像を読み取るために、学習課題の第3フレーズに「関係性」というキーワードを取り入れた。

#### 2. 問いをもたせる

「学びをつなぐ」ための「見える関係性とは何か」「見えない関係性とは何か」という問いに対して、意見交流の際には、「問い」に対する級友との考えの相違点や、共通点を比べながら、自分の読み方をより確かなものとしていった。

#### 3. 価値ある言語活動を設定する

「主体的な学び」を実現するために、「言語活動を通して、指導事項が達成できるか」「生徒にとって身近で、現実的な言語活動であるか」の2点に留意して、生徒が必然性をもてる活動として、本事例では、「弔辞を書く」という言語活動を設定した。

### 2. 研究討議

- Q. 場面に分けるのではなく、広くとらえて見届けで大事にしていることは何か。
- A. 学力差、下の子がなんとか上に上がりたい。評価規準を単元の最初に提示する。自分がどの段階にいるのか丸をつけさせ、「Cの子は、こうすればBに上げられるよ。」という助言をしている。
- Q. どこからが「A」、どこからが「B」なのか。評価規準の判断が難しい。今回の「弔辞を書く」では、どのようにされていたのか。
- A. 学習課題を中心として、Bを決める。上乘せして、A。足りないC。今回は、「関係性が表れている言葉」が表れていたらいと考えた。見えない関係が出てきたらAとした。

### 3. 指導助言

#### 【共有したいすばらしさ】

#### 1. 主体的学びを生み出す「問い」の設定

何でもいいのではなく、明確な意図をもって学習課題に関わる「問い」をもたせる。「問題発見、解決能力」を、国語の学習を通して育成しようとしている。

#### 2. 創意工夫のある言語活動の設定

「弔辞を書く」という言語活動は、「私」から見たルイ修道士というものを読む必然が生まれてくる。「私」とルイ修道士の見えない関係を読んでいかないと書くことができないため、大変工夫された言語活動である。何を読んでいかなければ書けないか。

#### 【考えていきたい点】

言語能力の育成の中心となる国語科においては、いかに多くの語句、表現を駆使でき、豊かな言語感覚を持った生徒を育成できるかが大変重要である。

教科書巻末のページを活用したり、辞書を常備したり、単位時間に意図的にある言葉を取り上げて生徒たちと考えたりするなど、語彙指導の改善充実を図ることは、新学習指導要領でも重視されている点である。全国的な課題でもあり、岐阜県の長年の課題でもある語彙の量を増やし、質を高めることを大切にしたい。

## 言語文化に親しみ、生活につなげる能力の育成

～古典の世界を身近に感じる指導の工夫～

単元「おくのほそ道の終着点・岐阜を想う」

～夏草一『おくのほそ道』から～

授業者：河合のぞみ（岐阜市立加納中学校教諭）

司会：砂田 真里（高山市立松倉中学校教諭）

記録：熊崎 智文（下呂市立金山中学校教諭）

加藤 陽介（高山市立日枝中学校教諭）

片山 博寿（岐阜市立加納中学校教諭）

部長：清水 裕樹（揖斐川町立坂内中学校教諭）

部会長：三輪 太雄（高山市立宮中学校校長）

助言：京谷 貴幸（飛騨教育事務所課長補佐）

### 1. 授業構想と本時のねらい

古典について「得意でない」と答える生徒の声を耳にする。その理由に目を向けると「現代との違い」を挙げることが多い。事実、授業クラスでも85%の生徒がそのように答えている。しかし、古典というのは何百年も何千年も現代に残ってきた文章である。残したいと願う人がおり、受け継がれ続けてきた文章である。今と時代や文化等はもちろん違うが、そこに息づく人々の熱量や、作品に綴られた洗練された言葉の美しさは今の私たちに通じる素晴らしさがある。だからこそ、いかに学習者と古典作品との心的距離を縮め、古典に「親しむ」生徒を育成するかに焦点を当て、下の3点を柱に単元を構成していった。

①芭蕉が歩んだ「おくのほそ道」の行程を追体験するように学習を積み重ねること

②岐阜県の財産、「おくのほそ道」結びの地「大垣」を教材化し、芭蕉の思いに触れること

③芭蕉の生き方から、自分の生き方に目を向け、これからの自分の歩みについて考えること

①では、教科書（光村図書）に記載されている「発端」「平泉」の他に、「旅立ち」「松島」「尿前の関」「山中」の場面を紹介し、どのような旅程であったのかを追体験できるように仕組んだ。選んだ場面は、結びの大垣で詠んだ「…行く秋ぞ」と対をなす、「行く春や鳥啼き魚の目は泪」を読んだ「旅立ち」。「発端」の場面で「松島の月まづ心にかかりて」と芭蕉が思いを馳せた「松島」。当初予感していたように様々な困難や別れのあった「尿前の関」「山中」。旅をする中で芭蕉の心が大きく動いたであろう場面を選んだ。そうすることで、自分だったら…と比較しながら考えることにつながり、芭蕉の決断・行動の尊さに気付くことができる姿をねらった。

②では、歴史上の人物が実はこの岐阜県にも訪れているということを知り、松尾芭蕉を直接的に身近に感じられることをねらった。今まで歴史の授業の中でしか聞いたことがなかった松尾芭蕉という人物が、私たちの近くに訪れており、もしかしたら自分と同じ景色を見たかもしれないと考えることで、芭蕉という人物をありありと想像できるようにすることを意図した。

③では、芭蕉の歩みを「すごい」の言葉で片付けるのではなく、いかに自分に引き寄せて考えるのかを大切にしたい指導を仕組んだ。芭蕉にとって旅は人生そのものであるが、生徒たちにとって「旅＝旅行」であり、そこまでの重みはもちろでない。しかし、彼らは中学校3年生として今自分の生き方を考えている最中である。だからこそ、芭蕉の生き方から学べることは多いはずである。自分が極めていきたいと思うものに命がけで向かい続ける芭蕉の生き方を、これからの自分の歩みにつなげていけることをねらった。

①②③を踏まえ、本時のねらいを、「『おくのほそ道』の大垣に着いた場面から、友人の労いや旅の終わりに対する芭蕉の思いを読み取る活動を通して、旅が終わるのでなくこれからも続いていくと考えている芭蕉の思いに気づき、旅に対する芭蕉の思いと自分の思いを比較して考えをもつことができる。」と設定した。それぞれの土地で、そこから見える景色に心を動かされ、その地を句に詠んできた芭蕉がこの場面では、「大垣」を句に詠んでいない。それは大垣の地は「おくのほそ道」の結びの地であって、「旅」の終着点ではないからだ。150日以上の旅を終えてもまだ、次を見続けている芭蕉の信念の強さに気付かせ、自分の生き方を見つめていくことで、古典に「親しむ」授業をねらった。

## 2. 研究討議

(質疑応答)

Q. 教科書(光村図書)には記載されていない江戸や松島の場面について、いつ、どのように指導を行ったのか。

A. 単元の導入のオリエンテーション時や、単位時間の終末の時間の中で指導を行った。特に、「旅立ち」では句の「行く春や」に着目させながら、見送ってくれる人たちとの別れの寂しさを読み取った。また、追体験させたい場面について、単元導入時に原文と現代語訳の記載されたプリントを配付し、事前に読んでおけるようにした。

Q. 松尾芭蕉について興味をもたせるためにどのような導入を行ったか。

A. 芭蕉の生い立ちや芭蕉が憧れた古人、芭蕉が訪れた場所等についてパワーポイントを用いてプレゼンテーションとしてまとめた。視覚的にイメージし、自分の旅と比較して考えられるように支援した。

(意見)

- ・課題化が生徒の思考の流れに即しており、主体的な一人読みにつながった。
- ・前時までの学習プリントを読み返したり、経験とつなげたりしながら、明確な根拠を基に

本時の読み取りを行っていた。

- ・教師と生徒の関係性のよさが伝わってきた。生徒一人一人に国語の魅力が伝わっていると感じた。
- ・地の文と句とをうまく融和しながら読むことができていた。
- ・三段ノートの書き方から、三年間の積み上げを感じた。板書を写すのではなく、学びを深めるためのノートの使い方が身に付いていると感じた。
- ・古典を身近に捉え、「自分ならこうだ」と、将来歩んでいきたい生き方に触れるまとめが書けていた。
- ・古典的表現である「ぞ」にも着目して、気持ちを読み取れる生徒にしたい。
- ・一人で読み取る力が身に付いている。だからこそ、交流の時間をどこで入れていくのが有効なのかを考えたい。

## 3. 指導助言

芭蕉の旅程と自分を重ね、読み味わっていくような授業であった。それは前時までの資料をペラペラめくりながら一人学びをする姿にも表れている。まさに、芭蕉が古人に憧れたように、一人一人が古人に思いを馳せた授業であった。

次期学習指導要領において、伝統的な言語文化の目標は全学年で「親しむ」ことに統一された。今後も学習者と古典との接点を大切にしながら、系統的に「資質・能力」としての古典に「親しむ」姿を目指し、授業を展開していくことが大切である。



## 言語文化部会研究発表

発表者：中島 英人（飛騨市立古川中学校教諭）  
上田 浩嗣（北海道札幌市立前田中学校教諭）  
司 会：砂田 真里（高山市立松倉中学校教諭）  
記 録：今井 康之（高山市立日枝中学校教諭）  
部 長：清水 裕樹（揖斐川町立坂内中学校教諭）  
部会長：三輪 太雄（高山市立宮中学校校長）  
助 言：京谷 貴幸（飛騨教育事務所課長補佐）

### 【中島英人教諭（飛騨市立古川中学校）の実践】

#### 1. 提案の趣旨

主体的に古典の世界に触れ、言語文化や言語事項を単なる知識として身に付けるだけでなく、生活に生かし、生活の中で用いることができるような生徒を育成したいと考えた。そこで、研究テーマを「言語文化に親しみ、生活につなげる能力の育成～古典の世界を身近に感じる指導の工夫～」とし、①古典の世界を豊かに想像する言語活動の工夫、②地域にかかわる伝統的な言語文化と関連させた単元指導計画の作成の2点を柱とし、岐阜県飛騨地区（高山市、飛騨市、下呂市、白川村）の教員と共に、実践を行った。

#### 2. 実践の概要

##### ①古典の世界を豊かに想像する言語活動の工夫

「親しむ」ためには、まずは古典の世界を豊かに想像できる生徒にしていく必要がある。そのために、小学校での学習内容との系統性を踏まえた題材を開発し、関心を広げたり深めたりする言語活動を設定した。第2学年「いにしへの心を訪ねる『漢詩の風景』」の実践では、小学校でも音読をしてきた漢詩に対してより抵抗感をなくし興味関心を引き出すために、教師による中国語での範読を行った。また、書き下し文など、既習事項を生かして自分たちでも漢詩を朗読できるように目的をもって学習を仕組み、語感を磨き語彙を豊かにすることをねらった。

##### ②地域にかかわる伝統的な言語文化と

##### 関連させた単元指導計画の作成

作品の世界をより深く理解し、実感的にとら

えていくために、岐阜県やそれぞれの地域に関連のある学習材を開発し、単元全体の中でどこに用いると効果的であるかについて考えた。

第1学年「いにしへの心に触れる」の単元において、「今昔物語」の百済川成との腕比べの場面を選定し、単元の導入に位置付けた。この話の中には、中学校歌の歌詞に出てくる「飛騨の工」が重要人物として描かれているからである。身近な世界と古典が結びつくように、単元構想を行った。

#### 3. 研究討議

- ・地元出身ではない教員が、地域教材を開発することは容易なことではない。しかし、これをきっかけに地元の方とのつながりができ、地域をよく知るきっかけになった。
- ・北海道は歴史が浅いので、本州のような古典が地域には残っていない。だからこそ、身近なものをどうやって教材化していくかを考えていくことは大切であると感じた。

#### 4. 指導助言

午前の公開授業と実践発表とのつながりを感じ、岐阜県内で力を合わせ、実践を重ねてきたことがよく伝わってきた。地域の教材を探し教材化しようとしたことで、内容解釈だけでなく、その人物の生き様や営みに触れることにつながった。地域教材を扱うメリットと同時に、扱う意図やタイミングを授業者が明確にもっていないと効果がないことも心しておきたい。しかし、何より教材化できる素材がないかについて、アンテナを高くもって教材研究をしていくことはこれからも大切である。

### 【上田浩嗣教諭（北海道札幌市立前田中学校）の実践】

#### 1. 提案の趣旨

今回の「学習指導要領」改訂では「何を学ぶか」だけにとどまらず、「何ができるようになるか」、そして「どのように学ぶのか」という「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められている。それを受け、伝統的な言語文化、主に古典の授業において「主体的・

対話的で深い学びの実現」に向けて、どのような手立てをもって実践に臨めばよいかを考えた。どの実践においても、①自らテキストや補助資料の読みを求めるような活動の工夫、②互いの違いがわかりやすく示され、対話的な学びが生まれる工夫、③対話を通して知識・理解が深まり古典への興味が高まる工夫を軸に、実践を行った。

## 2. 実践の概要

### ①「芭蕉とメールでやり取りをしてみよう」

「もしも江戸時代の芭蕉と現代の自分が、メールのやり取りができたとしたら、どのようなメール画面が出来上がるだろうか。」という活動を設定し、平泉に向かい、そこに着いた芭蕉とのメールのやり取りの画面を生徒一人一人が作成するという授業を仕組んだ。また、生徒一人一人が自ら学びを深めていくために「活動見通シート」と名付けた学習プリントを作成した。

### ②「万葉・古今・新古今の歌を、

#### ポップを作って紹介してみよう」

教科書に紹介されている万葉集・古今和歌集・新古今和歌集の和歌を現代のヒット曲に見立て、「自分のお気に入りの和歌をCDショップに並べられているようなポップを作って、紹介してみよう」という活動を設定した。ポップづくりを通して歌人の生涯や短歌の詠まれた背景等の理解を深めることをねらって授業を行った。

## 3. 研究討議

- ・古典の学習の入り口として、様々なアイデアをもって触れさせていくことは大切であると感じた。やはり、最後は原文に戻っていく指導も大切であると改めて感じた。
- ・芭蕉とやり取りするときに「芭蕉ならどのような言葉を使うだろう」という視点があると、人物像に迫った活動になるのではないかな。
- ・自分自身、「映画『竹取物語』の監督になろう」と言語活動を設定し、実践したことがある。どのように古典に親しませていくとよいか、これからも考えていきたい。
- ・古典をこちらに引き寄せる指導として、面白

いアイデアであると感じた。ただ、「主体的・対話的で」あったとしても、「深い学び」でなかったら意味がない。自分自身、そのことを意識しながら実践したい。

## 4. 指導助言

子どもたちが古典を楽しみながら、授業に臨んでいることがよく伝わってきた。高校で古典を専門的に深めていくためには、中学校で古典への抵抗を少なくしていくことが大切である。

「芭蕉とメールでやり取りをしてみよう」の実践では、自己内対話を通して、作品を深く読み味わっていることに価値がある。文章中の表現をもとに自ら問い、自ら答え、作品を読み深めていく活動は、今の子どもたちに合った実践だったのではないかな。また、言語活動が設定され目的意識をはっきりさせることで、「この資料がほしい！」と自ら求めていく生徒になると同時に、図書館活用の一助にもつながる。

ただ、言語活動は目的ではないことを念頭に置かないと、活動の楽しさにとらわれて、言葉に着目することを忘れることがある。そのことには古典においても注意していきたい。



## 一)本)の)電)話)か)ら)

平成26年の3月も終わりに近づいたある日。当時の小林会長からの「準備委員長を引き受けてほしい」という1本の電話、ここから私の全国大会は始まりました。

平成27年1月の役員会。「①期日は平成29年10月26日・27日 ②研究主題は『生きてはたらく言語能力の育成』 ③6分科会とし3校(加納・陽南・岐大附属)で授業を公開 ④A施設で全体会・分科会を行う」を提案しました。岐阜大会のコンセプトは、県内6地区がそれぞれの分科会を担当し実践を積み上げていく『オール岐阜』です。反面、大きな課題もあります。それは、限られた資金の中で、いかに出費を減らすかということです。特にA施設で行うことは…。

これまでの全国大会視察から、「A・3校の授業公開後に移動して、授業研究会や実践発表会を行える6つの会場がある イ・一日目の開会行事や二日目の閉会行事など参加者一同が会して全体会を行える大きな会場がある」が施設には必要と考え、A施設を挙げました。しかし、二日間にわたり施設を確保しなければならない点や、岐阜駅や3校からシャトルバスなどの移動手段を確保しなければならない点などから資金面で壁にぶつかりました。考えた末、『アとイはありき』という考え方を捨て、「3校で授業公開・授業研究会・実践発表会を行う。一日目の開会行事は参加者全員が同一会場で、二日目の閉会行事は分科会会場ごとで行う」へ変更しました。閉会行事を6会場で行うため、閉会行事でお願いしていた次期開催県会長挨拶は一同が会する開会行事に。また、岐阜駅に近い施設を探すことでシャトルバスの使用を回避する方向としました。

平成28年1月の役員会。A施設をじゅうろくプラザに変更し、場所や日程の最終案をやっと提出できました。それ以降は、さまざまな先生方に細部を考えていただき、当日は盛会で終わることができました。1本の電話から始まった全国大会でしたが、この1枚の紙面で締めくくらせていただきます。ありがとうございました。

全国大会準備委員長 安田英士

## 全(国)大(会)を(終)え(て)

話に聞いてきた平成5年の全国大会は夢のような話で、自分は経験することのないものだと思っていましたが、巡り合わせの中で関わる機会を得ることになりました。

加納中の会議室、長良中の校長室で何度も話し合いました。打合せが深夜に及ぶこともありました。“うーたん”にこだわる今井さんをなだめ、安田校長先生のデザインによる手提げ袋を特別支援学校の生徒に作っていただいたこと。あってはならない間違いを教えていただき、大会直前に全部の大会要項を修正したこと。労を厭わない諸先輩、同年代の仲間、そして、授業、生徒に向き合う後輩たちと、授業や研究とは違う部分でも同じ思いで仕事できたことは幸せなことでした。

膨大な時間、労力を費やしているのに、いつも笑顔で内外の対応をしてきた今井さん。当日動いていただいた岐阜地区、県下の先生方の動きの細部にまで気を配り準備をしてきた長谷川さん。授業、分科会、研究紀要と県内の実践を取りまとめる中心となった西門さん、各研究部長。伊藤会長の「オール岐阜」の言葉のとおり、県内の国語科部員が様々な形、立場で、働けたこと。また、組織や担当だけでは対応できない隙間を埋める思いや動きがあったからこそ成り立った全国大会でした。そして、決して忘れてならないのが、この全国大会が中国研の長い歴史、営みの上で成り立った大会であったことです。

歴代会長先生をはじめとするOBの先生方、これまで中国研を牽引してくださった先輩、前任の河合さん、そうした方々の歩み、支えは自分たちの背中を強く押していただけました。

伊藤会長は、研究の「広がり」と「深まり」を全国大会後の動きとして示されました。今後も言語能力の高まりを実感する言語活動を充実させ、「生きてはたらく言語能力の育成」を広げ、深めていくことが、先輩方、そして何より県内の生徒への恩返しです。次世代にバトンを渡す時まで、次の全国大会まで、県中国研としての実践をつないでいきましょう。

全国大会事務局長 永 井 伸 幸

## ●●●「人のつながり」を感じた全国大会 ●●●

大会1日目の夜、鹿児島県中学校国語教育研究会会長の校長先生が「本当に気持ちがいい大会ですね。皆さんの動きに参会者に対する心配りが感じられます。」とおっしゃっていただいたことを思い出します。再度校長先生と2日目に岐阜大学教育学部附属中学校でお会いしましたが、「授業も実践発表も本当に素晴らしかったです。提案性もありました。特に生徒が大変主体的でよかったです。持って帰って県に広めていきたいと思います。」と握手をいただいたことを昨日のここのように思い出されます。また、参会者の感想では、「圧倒された」という表現で認めてくださった先生もおられ、「オール岐阜」で取り組んだ成果が表れているように感じました。

このような素晴らしい大会にすることができたのは、岐阜県の先生方の「熱意」に他なりません。大会1日目の午前、岐阜駅構内に向かったところ、案内1時間前にもかかわらず全国の先生方を誘導するために準備をしてくださる姿。大会2日目、受付で名札が足りなくなった際、その場にあるもので対応してくださる姿。授業が開始されても遅れてきた方を案内できるように駐車場の外で誘導していただいていたお姿。HP作成や紀要編集、書類申請、会計処理、岐阜特別支援学校高等部の生徒などすべての方々が真摯に支えていただけたことが成功の要因だと思います。岐阜地区の先生方をはじめ、大会にかかわった方々に心より感謝申し上げます。

大会運営に関わらせていただいて、これほど「人のつながり」の大切さを感じたことはありませんでした。大会の開催決定より本大会に携わってくださったすべての方々のご厚意に感謝して、この稿を締めくくらせていただきます。

事務局 今井 則雄

## ●●●オール岐阜で臨んだ研究体制 ●●●

「オール岐阜」「生徒主体の授業づくり」をキーワードに「生きてはたらく言語能力の育成」を目指し、岐阜県中国研の全国大会研究部は発足しました。

岐阜県の従来からの研究体制を大きく改変し、先の全国大会（岐阜大会）に習って、岐阜・西濃・美濃・可茂・東濃・飛騨の6事務所管内毎に、書くこと（豊かに書く）・読むこと（説明的文章）・読むこと（文学的文章）・話すこと聞くこと・書くこと（確かに書く）・言語文化の研究領域をあて、「オール岐阜」で臨む組織的な研究体制にした新しい出発でした。

伊藤大会実行委員長、安田副実行委員長、加知研究部顧問のご指導を得て、塚本、伊藤（京谷）、野島、小宅、上村、清水（高橋）の各領域部長のお蔭で、全国大会までの長き期間を無事に乗り越えてこられたことを感謝しております。

私自身、全国大会を成功に導く大役、研究総括として大きな不安もありました。しかし、研究部のメンバーと担当領域の地区の先生方は、研究授業はもちろん、実践発表についても、それぞれの指導案や実践から検討し、全国に提案していこうと研究を進めてくださいました。6地区を回りましたが、どの地区でも「自分たちの実践が全国の役に立てれば…」という思いを感じました。

これまでに所属の学校には大変ご迷惑をかけ、数多くの出張も許可いただきました。また、研究部のメンバーは、旅費もままならず、手弁当の状況の中で研究会や準備に参加していただきました。お蔭さまで、全国からたくさんの国語教師の参観を得て、新学習指導要領に向かう提案性の高い発表ができ、大好評の内に大会を終了することができました。本当にありがとうございました。

最後に、たくさんの先生方と出会い、志をともにする「仲間」を数多く感じられた、この素晴らしい機会を与えてくださった皆様に感謝します。この縁をいつまでも大切にして、これからも国語人として互いを磨き合いたいと思います。ありがとうございました。

研究総括 西門 純

### ●●● 大きな力と細やかな心配りに感謝 ●●●

運営部は、この全国大会（岐阜大会）を運営するために立ち上げた部会です。文字通り何もないところからのスタートでした。まず、岐阜地区の運営役員の先生方にどのように動いていただくのか、計画を立てることから始めました。運営役員の先生方が集まれるのは、事前の1回と当日のみ。どうしたら動きやすいのか、どうしたら大会が滞りなく進むのか、想像力を最大限に発揮しながらの作業でした。

当日は、運営部員の先生方に加えて岐阜地区の運営役員の先生方が、それぞれの分担の所で力を発揮していただき、全国大会（岐阜大会）を、無事、運営することができました。運営に専念していただいたために、講話や講演を全く聞けなかった、授業や実践発表に全く参加できなかった先生もいらっしゃることを聞き、大変申し訳なく思っています。また、2日目には、各会場校の責任者の先生、会場校の国語科以外の先生方にもお世話になりました。運営部員、岐阜地区運営役員、会場責任者、会場校の先生方、本当にありがとうございました。

私は、1日目、全体会の司会をさせていただきました。貴重な経験だったと感謝しています。舞台裏で待機している横では、じゅうろくプラザのお二人の方が音響や照明の調節をしてくださっていました。話す方が引き立つよう、会場の方が聞きやすいよう、臨機応変に対応していただき、様々な人の協力あっての大会であったとありがたく思っています。

全国大会（岐阜大会）を通して感じられた多くの方の大きな力と細やかな心配りは、私にとって忘れられないものです。この機会を通して学ばせていただいたことを、次の全国大会（岐阜大会）で…というわけにはいきませんが、中国研で、国語に関わるところで、活かしていきたいと思えます。ありがとうございました。

運営部長 長谷川 圭 奈

## ご意見、ご感想、ありがとうございました。

大会に対して多くのご意見・ご感想をいただきました。その一部を紹介させていただきます。

静岡県焼津市立大富中学校 河合玄哉 先生  
岐阜県全体で「生きてはたらく言語能力」というものを定めたのがとても素晴らしいと思いました。参考にしていこうと思います。陽南中学校という学校自体が「同一歩調で子供たちを育てていくんだ」という思いをもちながら、教育活動に励んでいることがよくわかりました。授業自体も非常に落ち着いており、グループを指定しなくても近くの生徒同士でしっかり話し合っているし、発表もたくさんあって驚きました。

授業の中での先生の発言、板書、実践発表などこれからは生かしていきたいと思ったこと、また、頑張っていきたいと思えましたし、何より来させていただいて良かったと思いました。

長崎県諫早市立真城中学校 北原千恵子 先生  
非常に多くのことを学ばせていただきありがとうございました。言語能力一覧表の素晴らしさは今後の指導に対する示唆としていきたいと思っています。主体的・対話的で深い学びを生み出す生徒の姿を具現した授業を楽しみにしております。生徒たちの主体的な様に感動しました。また、実践発表においても学ぶことが多く、大変有意義な時間となりました。

北海道下川町立下川中学校 島田年恵 先生  
発問に対し反応よく全員が答え、発表の態度、聞く姿勢も素晴らしく意欲的な姿に感動しました。生徒の考えをゆさぶり、「学びたい」と意欲を向上させる授業の積み重ねがなければできないことだと思います。題材設定や個に応じた指導の充実など生徒の実態をしっかりつかみ、綿密な計画など自身の研修に努めればならないと痛感しています。また、様々な実践発表もお聞きすることもできました。貴重な研究実践を見せて頂きありがとうございました。

滋賀県大津市立日吉中学校 田川 学 先生  
授業での子どもの反応に驚きました。例えば教師の発問に対して全員が口々につぶやく、述べる場面です。これは学校や岐阜県の指導観や生徒観がよく表れており、興味深かったのですが、一斉でどこまで個々の声を拾えるのかという疑問をもちました。同様に研究の全体像も岐阜スタイルとも言うべきまとまりを感じました。せっかくの全国大会なので、こういった独自の教育スタイルについて議論ができれば良かったと考えます。

愛知県江南市立布袋中学校 稲垣眞司 先生  
実践発表分科会において、長崎市の桐谷先生の発表が非常に参考になった。特に学習課題の設定の3つのフレーズは今後の授業に役立てていきたい。公開授業の生徒の姿はとても素晴らしく、自分の意見が述べる作業も苦にしていないうように驚いた。少しでも近づけられるにしていきたい。

香川大学教育学部附属高松中学校 一田幸子 先生

- ・生徒の学びに向かう姿は本当に素晴らしいと思いました。
- ・自分の考えを形成させるために行った授業の生徒のワークシートやノートなどが見てみたかったです。
- ・杉本先生の講話は大変わかりやすかったため、欲を言えば、もう少し時間をかけて伺いたかったです。

宮崎県大崎市立古川北中学校 櫻井正昭 先生

- ・発表態度、聞く姿勢、挙手など、日ごろの学習習慣の定着がみられた授業でした。
- ・音読の様子も生徒の真剣さが感じられてよかった。
- ・新学習指導要領の趣旨を踏まえ地域の実態に応じた適切なテーマであったと思います。

愛知県犬山市立南部中学校 深見倫見 先生  
とても興味深いです。ひとつの授業を作り上げるのに、たくさんの試行錯誤があったことがうかがえましたが、どのくらいの力、時間を注いでみえたかと思うと頭が下がります。子供たちの豊かな学びに相對するには、こちら側の十分な授業準備が必要であることを改めて感じました。日々、時間がないことを言い訳にしている自分を反省です。私の学校で私のできる限りのことをやっていきたいと思えます。子供たちの力は無限にありますね。ありがとうございます。国語の力とは何なのか…日々悩みます。

熊本県阿蘇市立一の宮中学校 石川洋介 先生  
公開授業を拝見しながら、本時の9/9時間目に至るまでの先生の計画的な単元構想や深い教材研究、そして手厚いコメントの存在を知りました。実践発表会では、1つの取り組みを「続ける」ことの大切さを痛感しました。本日は岐阜に行けて、本当に良かったです。ありがとうございました。

愛知県 楓 浩幸 先生  
学びを深めるという観点で多くのことを学ばせていただきました。特に授業で生徒たちの多くが多彩な語句を使い、相手の意見を生かしながら、言葉をつないでいく姿はとても素晴らしく思いました。自分が今年度「故郷」をやった

時に授業の中で、自分の生き方にリンクさせる部分がなかなかできなかつたと思っています。自分自身につなげる大切さを感じました。

福岡県教育センター 井手久美 先生  
杉本調査官のお話をもっとゆっくりとお聞きしたかったです。金田一先生のお話はいろいろな問題が提起され、自分自身大変考えさせられました。

公開授業の主体的に学ぶ生徒たちの姿に感動しました。教科係の子たちの主体性にも驚きました。このような公開授業を見せていただくといつも思うことなのですが、単元末のこの姿に向かうまでの学習（読解場面）を見せていただきたいなあと。とても内容の濃い一日で大変勉強になりました。ありがとうございました。

長崎県長崎市岩屋中学校 田中裕佳 先生  
「話す・聞く」の授業に参加しました。とてもレベルが高く圧倒されました。生徒が自ら学ぶ、自ら話すという姿はとても輝いていました。来年、九州大会で私も発表をするので、参考にしようという気持ちで臨みましたが、圧倒されるほどでした。どうしたらこんな話し手・聞き手になるんだろう。と思ってばかりでした。とても良いものを見させてもらいました。ありがとうございました。

### 都道府県別 大会参加者数

都道府県名	参加人数	都道府県名	参加人数	都道府県名	参加人数
北海道	1名	静岡県	6名	長崎県	14名
岩手県	1名	愛知県	30名	熊本県	2名
宮城県	1名	滋賀県	6名	宮崎県	1名
福島県	1名	京都府	2名	鹿児島県	1名
栃木県	3名	鳥取県	8名	沖縄県	1名
群馬県	1名	島根県	1名	県外	125名
埼玉県	1名	岡山県	11名	県内	391名
千葉県	2名	広島県	2名	総数	516名
東京都	18名	山口県	2名		
神奈川県	1名	香川県	3名		
石川県	1名	愛媛県	1名		
岐阜県	391名	福岡県	2名		

## 全日本中学校国語教育研究協議会岐阜大会 研究メンバー

領域	可茂：話す聞く		東濃：書くⅠ（確か）		岐阜：書くⅡ（豊か）	
担当校長	広陵中	野田 守彦	中津二中	松井紀史朗	長良中	長村 寛
部長	星和中	塚本 陽治	本荘中	伊藤 雄樹	日枝中	野島 将也
授業者	陽南中	篠田 陽子	加納中	梅田 佳宏	附属中	野々村琢磨
実践発表者	中部中	加藤 祐輝	瑞浪中	水野 寛大	高富中	深尾 寛
代議員	中部中	●木下静樹	平和中	堀田 雅也	羽島中	宇野 早織
	川辺中	橋本 奈美	西陵中	樋田絵美子	各中央中	安田 梨紗
	向陽中	濱嶋 雅之	瑞陵中	増田 健太	穂積北中	福本 昌代
			恵那西中	●郷田 賢	糸貫中	○江口知衣子
			付知中	太田 慎哉	岐南中	○馬場雅也
					北方中	平野 栄子
部 員	美加西中	◎小笠原友紀	桜ヶ丘中	加藤 尚子	長良中	若原 雅史
	美加西中	細江 隆一	多治見中	◎谷口順子	東長良中	足立 美穂
	黒川中	◎肥田智成	泉中	西尾 新	羽中央中	◎原 博一
			北陵中	◎伊藤 瞳	那加中	●桃瀬寛明
			北陵中	浅井 章	各中央中	丹下 侑輝
			恵那西中	夏目 忠洋		
		恵那東中	◎小島光太郎			

●司会者    ◎記録者    ○写真

領域	西濃：読むⅠ（説明）		美濃：読むⅡ（文学）		飛騨：言語文化	
担当校長	輪之内中	香田 静夫	白鳥中	片桐 一男	宮 中	三輪 太雄
部長	東長良中	小宅 陽久	大和中	上村 光一	坂内中	清水 裕樹
授業者	陽南中	北原 章大	附属中	山田 優貴	加納中	河合のぞみ
実践発表者	池田中	児玉 岳	桜ヶ丘中	馬場 多希	古川中	中島 英人
代議員	江並中	○加藤広恵	武芸川中	古山 孝明	中山中	西岡 隆行
	日新中	側島 逸男	美濃中	◎中田哲朗	神岡中	森本 恵美
	養老東部中	◎細川 誠	大和中	○島津宏司	萩原南中	金子 紀之
	垂井北中	伊藤 友翼			白川郷学園	上條 亘
	登龍中	小林 静香				
	大野中	◎笠井章子				
部 員	大垣東中	●渡辺孝充	緑ヶ丘中	●古川寛之	加納中	○片山博寿
	陽南中	西田 薫			東山中	道上 修身
					日枝中	◎加藤陽介
					松倉中	●砂田真里
					金山中	◎熊崎智文
					日枝中	◎今井康之

●司会者    ◎記録者    ○写真

## 大会実行委員会役員一覧

### 【岐阜大会実行委員会】

実行委員長	伊藤 勝彦	恵那市立明智中学校長	(岐阜県中学校国語科研究部会 会長)
副実行委員長	安田 英士	岐阜市立岩野田中学校長	(岐阜県中学校国語科研究部会 副会長)
副会長	長村 覚	岐阜市立長良中学校長	(岐阜県中学校国語科研究部会 副会長)
副会長	香田 静夫	輪之内町立輪之内中学校長	(岐阜県中学校国語科研究部会 副会長)
副会長	大蔵 徹哉	安八町立登龍中学校長	(岐阜県中学校国語科研究部会 副会長)
副会長	片桐 一男	郡上市立白鳥中学校長	(岐阜県中学校国語科研究部会 副会長)
副会長	野田 守彦	可児市立広陵中学校長	(岐阜県中学校国語科研究部会 副会長)
副会長	松井紀史朗	中津川市立第二中学校長	(岐阜県中学校国語科研究部会 副会長)
副会長	三輪 太雄	高山市立宮中学校長	(岐阜県中学校国語科研究部会 副会長)

### 【岐阜大会 事務局】

事務局長	永井 伸幸	岐阜市立青山中学校 教頭
事務局副部長	曾我部雄志	可児市立中部中学校 教頭
事務局副部長	山本 学	輪之内町立輪之内中学校 教頭
事務局副部長	加知 昌彦	恵那市立山岡中学校 教頭

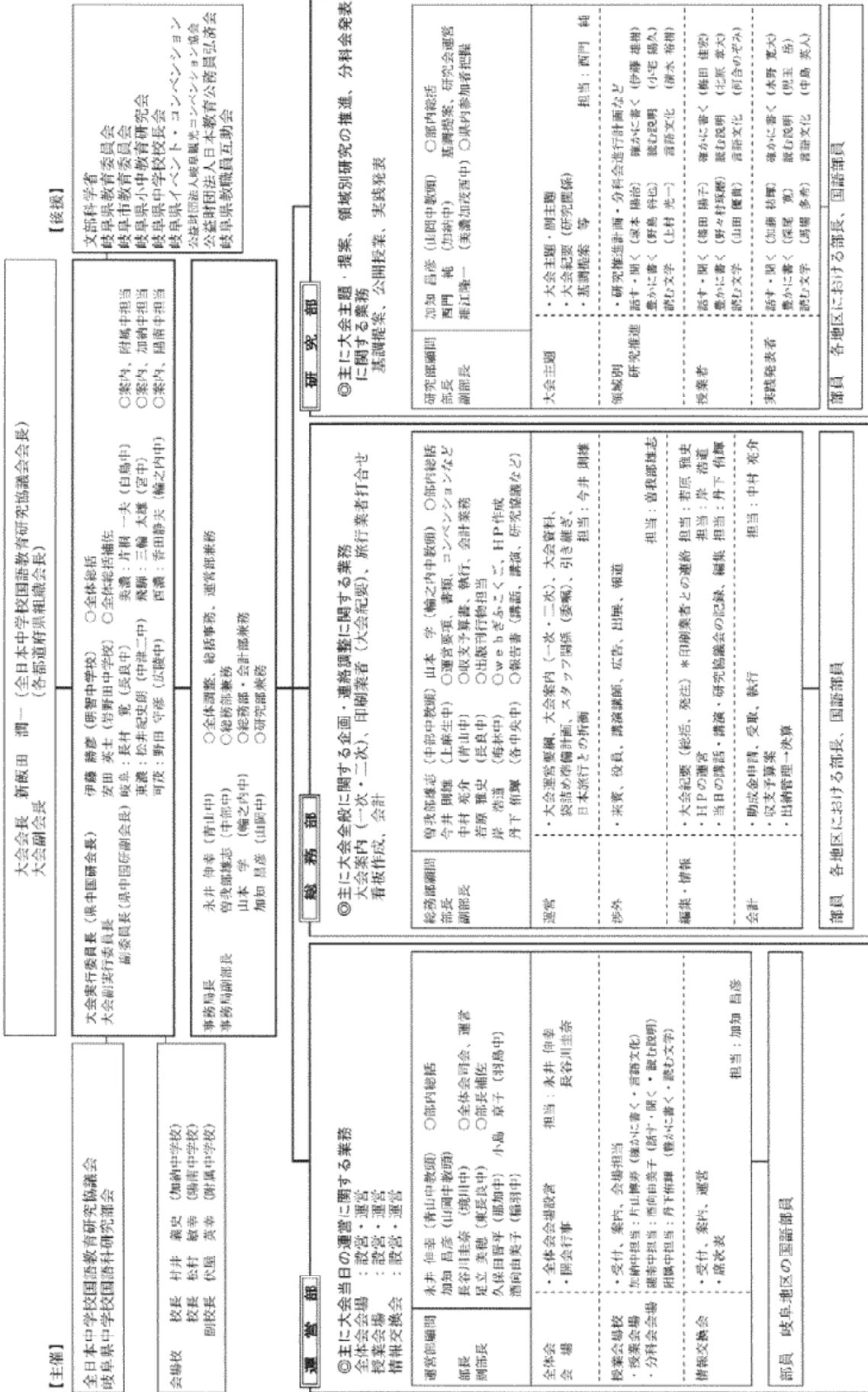
### 【事務局 専門部】 (◎部長 ○副部長)

総務部	◎今井 則雄 (上麻生中)	
	○岸 浩道 (梅林中)	
	○中村 亮介 (青山中)	
	○若原 雅史 (長良中)	
	○丹下 侑輝 (各務原中央中)	
運営部	◎長谷川圭奈 (境川中)	
	○足立 美穂 (東長良中)	○大島 淳 (本荘中)
	○久保田晋平 (那加中)	○青木 崇 (岐北中)
	○小島 京子 (羽島中)	○松原 睦 (青山中)
	○酒向由美子 (稲羽中)	○村上 薫子 (各務原中央中)
研究部	◎西門 純 (加納中)	
	○細江 隆一 (美濃加茂西中)	

### 研究領域 (◎領域部長 ○副領域部長)

話すこと 聞くこと	◎塚本 陽治 (星和中)	書くこと (確かに書く)	◎伊藤 雄樹 (本荘中)
	○篠田 陽子 (陽南中)		○水野 寛大 (瑞浪中)
書くこと (豊かに書く)	◎野島 将也 (日枝中)	読むこと (説明的文章)	◎小宅 陽久 (東長良中)
	○深尾 寛 (高富中)		○渡辺 孝充 (大垣東中)
読むこと (文学的文章)	◎上村 光一 (大和中)	言語文化	◎清水 裕樹 (坂内中)
	○古川 寛之 (緑ヶ丘中)		○砂田 真里 (松倉中)

第46回 全日本中学校国語教育研究協議会 岐阜大会実行委員会 組織図



# 中学校国語部会会則

(名称)

第1条 本会は、岐阜県小中学校教育研究会中学校国語研究部会（略称中国語部会）と称する。

(事務局)

第2条 本会の事務局は部会長の指定する学校に置く。

(目的)

第3条 本会は岐阜県中学校国語教育の向上と充実を図ることを目的とする。

(事業)

第4条 本会は第3条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 研究大会の開催
- 2 講演会・講習会等の開催
- 3 研究の相互交流と研究調査
- 4 研究成果と機関誌の刊行
- 5 会員相互の親睦を図ること
- 6 その他目的を達成するために必要なこと

(構成)

第5条 本会は、岐阜県公立中学校の教職員をもって主たる構成員とする。

(役員)

第6条 本会に次の役員を置く。  
会長・副会長・顧問・事務局（主務・書記・会計）研究部総括・評議員・監査・運営委員・代議員（各郡市1名、必要に応じて代議員代行者を置くことができる）

(役員の選出)

第7条 本会の役員は会員のうちから次の方法で選出する。

- 1 会長・副会長・顧問は代議員会で選出する。

る。

2 事務局・評議員・監査及び運営委員は、代議員会の承認を得て会長が委嘱する。

3 代議員は各郡市より1名を選出する。

(役員の仕事)

第8条 1 会長は本会を代表し会務を総括する。

2 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する。

3 顧問は、本会が円滑に活動できるように助言をする。

4 事務局は、本会の会務を処理する。

5 評議員は、教育研究会評議員会への本会の代表とし、本会等の運営を円滑に行えるよう配慮する。

6 代議員は、代議員会で審議事項の議決にあたる。また、その選出郡市に代議員決議内容を伝達する。代議員はその選出郡市の研究活動の推進を図る。

(任期)

第9条 役員の仕事は1年とする。ただし再任をさまたげない。

(機関)

第10条 本会に代議員会、運営委員会を置き、必要に応じて専門委員会をおくことができる。

第11条 代議員会は、本会の議決機関であって、代議員とその他の役員で構成し、年1回以上部会長が召集する。代議員会は次の事項を審議決定する。

1 会則等の改廃に関すること。

2 予算の議決および決算の承認に関するこ

と。

3 役員の仕事に関すること。

4 研究テーマの推進、事業運営に関すること。

(運営委員会)

第12条 運営委員会は、必要に応じて部会長が召集し、代議員会の決定にしたがって本会の会務を推進する。

1 本委員会は、部会長・事務局・各専門委員長で構成し、その他、必要に応じて、部長の委嘱された者で構成する。

2 実践研究に関すること。

3 研究大会、講演会等の企画運営に関すること。

4 会務運営の推進及び調整に関すること。

5 全国中学校国語研究会への参加に関すること。

6 緊急必要な場合は代議員会を代行することができる。

7 その他、本会の運営に必要なこと。

(専門委員会)

第13条 代議員会で承認された専門的な事項を処理するために、部会長が委嘱した委員でこれにあたる。

(経理)

第14条 本会の経費は、会費・補助金・その他の収入をもってこれにあてる。

会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日で終わる。

附則1、この会則は昭和59年4月1日より施行する。

2、この会則は平成9年4月1日より改正、施行する。

きんこく 第68号

平成三十年二月発行

発行人 伊藤勝彦

発行所 岐阜県小中学校教育研究会

中学校国語部会

編集 中国研 広報部会

丹下 侑輝

山田 優貴

野々村 琢磨

豊田 有美

印刷所 昭和ふりと

電話〇五八―二九四―八七八一